

- 三 尖端軌條ヲ操作スル操作器ハ片働ニナラサル如ク取附クルヲ要ス
- 四 轉轍器及轍又ノ附近ハ枕木間隔狭ク且軌條數多キヲ以テ填塞ニ方リ搦固ヲ十分ナラシムルヲ要ス
- 五 轉轍器及轍又用ノ爪「ボルト」ノ孔ヲ枕木ニ穿孔スルニ方リテハ「ボルト」ト同徑ノ螺錐ヲ使用スルヲ要ス
- 第十七 轉轍ノ構築ニ要スル作業人員ハ轉轍ノ種類、軌條ノ重量、轉轍器、轍又ノ形狀並使用シ得ル器材、時間ノ長短ニ依リ異ナリ一定スルヲ得サルモ四十疋直線轉轍ノ構築ニハ通常一分隊ニテ約三時間ヲ以テ完成シ得ルヲ標準トス
- 第十八 既設軌道中ニ中間轉轍ヲ挿入スル場合ニ於テハ轉轍長ニ應スル既設軌道ノ軌條、枕木、道床ヲ除去シ要スレハ均地ヲ行ヒ側方ニテ組立ノ上移動挿入スルモノトス此際既設軌道長ト轉轍長ト一致セサルトキハ既設軌道ノ軌條ヲ截斷スルコトナク挿入轉轍ノ終端ニ短軌條ヲ接續シ除去部ノ長

サト一致セシムルモノトス

- 第十九 既設軌道上ニ於テ運轉ヲ中絶セシムルコトナク轉轍ヲ構築スルニハ軌道除去部ノ道床ヲ掘開シテ轉轍用枕木ヲ挿入シ（此際必要ニ應ジ既設軌道ノ枕木ヲ除去シ舊軌條ヲ一時挿入セル轉轍用枕木ニ固定ス）次テ本線ノ運轉ニ必要ナル轍又、之ニ附隨スル直線中間軌道、尖端軌條ヲ敷置シテ舊軌條ト交換固定シテ先ツ本線ヲ完成シ次ニ支線ニ對スル尖端軌條、曲線軌條ヲ敷置固定スルモノトス
- 軌道除去部ト挿入轉轍長ト一致セサルトキハ第十八ニ準スルモノトス

轉轍ノ修理

- 第二十 轍又ノ修理ハ左ノ要領ニ依ルモノトス
 - 一 同一ノ轍又番號ノ轍又ヲ有スルモ其構造ヲ異ニシ鼻端軌條、翼軌條ノ長サ舊轍又ト異ナルトキハ接續スヘキ軌條ヲ截斷スルカ又ハ短軌條

ヲ挿入スルモノトス

二 轍又番號ノ異ナル轍又ヲ使用スルトキハ轍又ノ位置ヲ變更シ且轉轍曲線ノ經始ヲ修正スルモノトス此場合新舊轍又番號ノ差ニ百五十耗ヲ乘シタル距離ヲ其移動長トシ本線上ニ於テ轍又番號大ナルトキハ前方ニ、小ナルトキハ後方ニ取リテ學理上ノ轍又點ノ位置トシテ轍又ヲ配置シ舊軌道ニ接続ス

三 交換スヘキ轍又ヲ有セス且急速ナル修理ヲ要スル場合ニ於テハ轍又角ニ應スル如ク旋回裝置ヲ施セル短軌條(急造轍又)ヲ以テ行フヲ要スル急造轍又ノ構造ハ第二圖ノ如ク短軌條「イロ」(轍又ノ長サニ應セシム)ヲ枕木又ハ枕木上ニ裝シタル鐵板ノ上ニ敷置シ兩軌條軸心ノ交叉點「ハ」ヲ通スル垂直軸周ヲ回轉セシメテ本、支線何レニモ裝定シ得シム而シテ回轉裝定後ハ兩端及中央ヲ狗釘ヲ以テ固定スルカ又ハ他ノ處置ヲ爲シ列車通過ニ際シ衝擊ノ爲移動セサル如クス

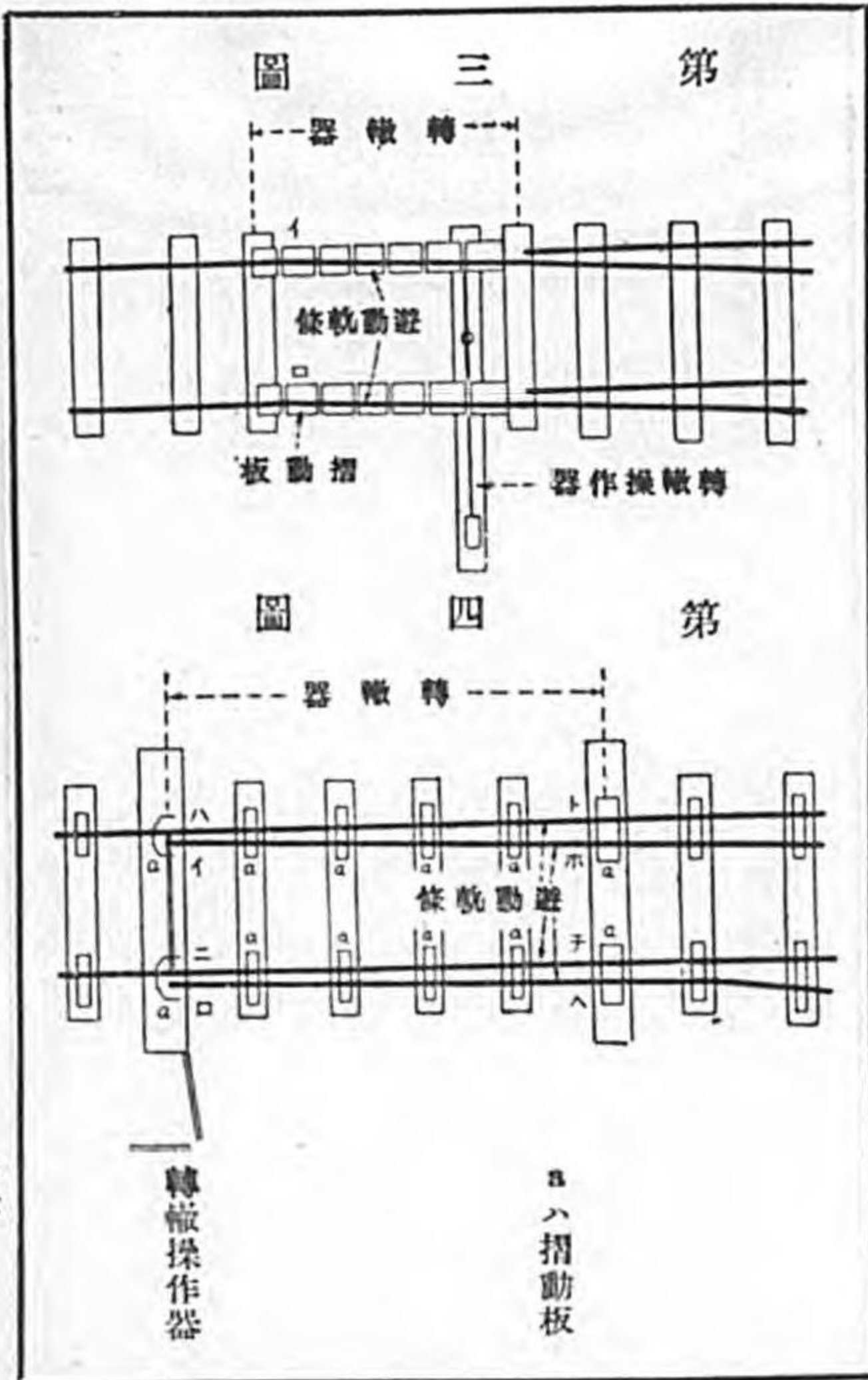
第 二 圖



第二十一 尖端軌條ノ破損、破壊セル場合ニ於テハ左ノ要領ニ依リ修理ス

一 異ナリタル尖端軌條ヲ以テ交換スルトキ尖端軌條踵部ノ開程ヲ顧慮シテ裝著シ要スレハ尖端軌條ノ轉轍角ニ應スル如ク轉轍曲線ヲ修正ス

二 交換スヘキ尖端軌條ヲ有セサル場合ニ於テハ急造遊動軌條ヲ以テ行
 フヲ要ス
 急造遊動軌條ノ構造ハ第三、第四圖ノ如ク尖端軌條長ニ應スル短軌條
 ヲ鐵板ヲ介シテ枕木上ニ配置シテ遊動セシムルモノニシテ第三圖ハ遊
 動軌條ノ「イ」「ロ」端ヲ軸心トシテ他端ヲ遊動セシメ本線又ハ支線ノ
 軌道ニ列車ヲ誘導セシムルモノニシテ第四圖ハ遊動軌條ヲ重複シ「ハ
 ト」「ニチ」ノ軌條ハ本線用ニ、「イホ」「ロヘ」ノ軌條ハ支線用トシ操作
 器ニ依リ「イ」「ロ」「ハ」「ニ」ノ部ヲ遊動セシム



第二十二 急造ノ轍叉及遊動軌條ヲ構築スルニ方リ注意スヘキ事項左ノ如シ

- 一 旋回遊動スヘキ軌條ノ位置正シク且接続軌條トノ連接完全ニシテ列車ノ衝擊、車輪ノ脱軌ヲ防クヲ要ス
- 二 開程ノ度ヲ適當ニシ脱線ヲ防クヲ要ス
- 三 旋回遊動軌條ハ完全ニ固定シ得サルヲ以テ之カ固定ノ處置ハ爲シ得ル限リ綿密ナラシムルヲ要ス

第二十三 轉轍ノ修理ニ方リ短軌條ヲ使用スル場合ニ於テハ二米以上ノモノヲ使用シ少クモ枕木三間隔ニ應スル長サヲ有セシメ已ムヲ得サル場合ニ於テハ枕木間隔ヲ短縮シ三枕木上ニ應シ得ル如クスルヲ必要トス

鐵道教範草案 停車場設備 附錄終

項目	式	寸法	材料	数量
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

(用岐分條軌疋十三)叉轍番十

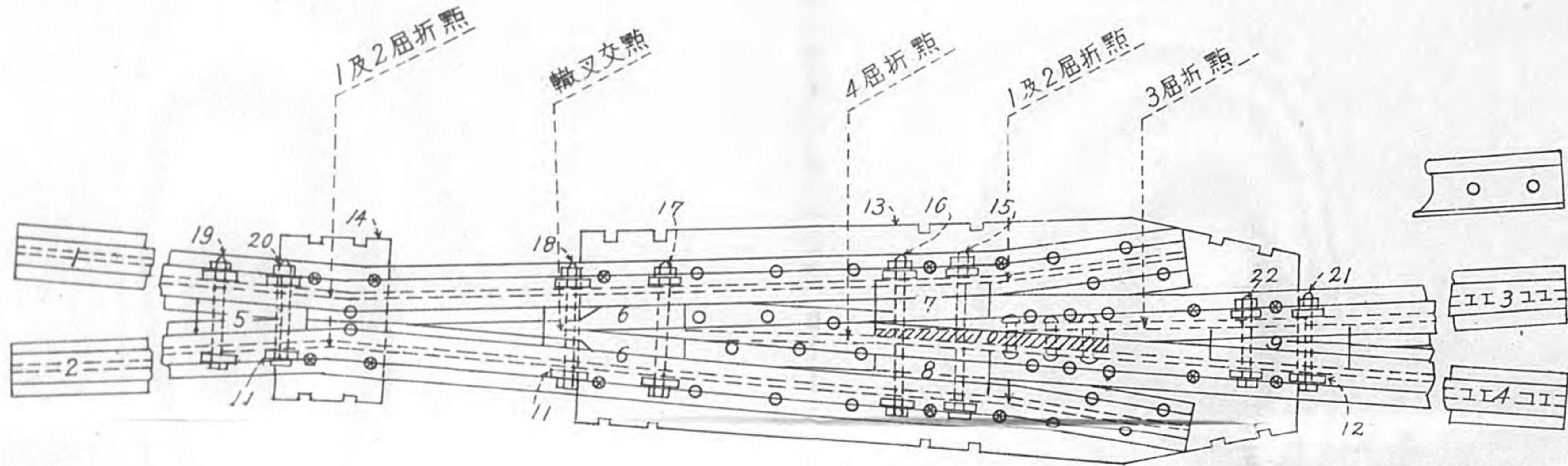


表 料 材

符號	名 稱	寸 法	員 數	記 事	符號	名 稱	寸 法	員 數	記 事
1	翼軌條	2.653	1		14	轍叉床板	230×127×350	1	徑 6.4 割ピン附
2	同 上	2.653	1		15	ホルト	徑25.4,長サ340	1	同 上
3	鼻端短軌條	2.143	1	イ=60 口=569	16	同 上	徑25.4,長サ330	1	同 上
4	鼻端長軌條	2.773	1	ハ=1.165	17	同 上	徑25.4,長サ280	1	同 上
5	間 隔 材	230	1	イ=97 口=130	18	同 上	徑25.4,長サ260	1	同 上
6	同 上	290	2	ハ=69 ニ=76	19	同 上	徑25.4,長サ230	1	同 上
7	同 上	230	1	ホ=77	20	同 上	徑25.4,長サ220	1	同 上
8	同 上	230	1	ヘ=92 ト=11	21	同 上	徑22.2,長サ190	1	徑 4.8 割ピン附
9	叉尾填材	300	1	イ=42	22	同 上	徑22.2,長サ180	1	同 上
10	填 材	70×42×490	1	口=42					
11	座 鐵	79×16×80	12						
12	同 上	79×16×80	4						
13	轍叉床板	20×12×1.524	1						

單位ハ耗トス

一 招 魂 式

招魂式ハ四月廿六日午後八時ヨリ十時十分ニ互リ最モ莊嚴ニ行ハレタリ

政務大官 回付 決裁前連帶
參與官 決裁後課名



決行(決裁)後
回覽課名



保存期限

決裁指定

決行指定

受領番
號領

鐵道敷設草案 鐵道橋樑算案要旨件

起元廳(課)名

政務總監部

大臣

五

政務次官

主務局長

參與官

高級副官

書記官

主務副官
官房御用掛

審案
筆記者

主務局長 受領番號
昭和九年八月十五日
提出 受領番號
昭和九年八月廿八日
大官 受領番號
昭和九年八月廿五日

連帶 決行(決裁)後
局長

局長

課長

課長

課長

課長

課長

課長

左

右

大臣ヨリ教育總監へ回答案

八月十一日放庶第三四三州
アノニ首題ノ件異存無之
陸普
ヲ以テ照會

陸普第五一二六號 昭和九年八月廿八日

大臣ヨリ	教育總監	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日
陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日	陸普第五一二六號	昭和九年八月廿八日

陸普第五一二六號 昭和九年八月廿八日

天箱

陸軍省 第二二四三號

教庶第二二四三號

鐵道教範草案 鐵道橋 編纂要旨ノ件照會

昭和九年八月十一日

教育總監 眞崎甚三郎

陸軍大臣 林銑十郎殿

首題ノ件別紙ノ如ク致度ニ付意見承知致度

陸軍省 9.8.14 大臣官房

陸軍 9.8.14 受 256 號

陸軍省 教育總監 眞崎甚三郎

鐵道教範草案 鐵道橋 編纂案要旨

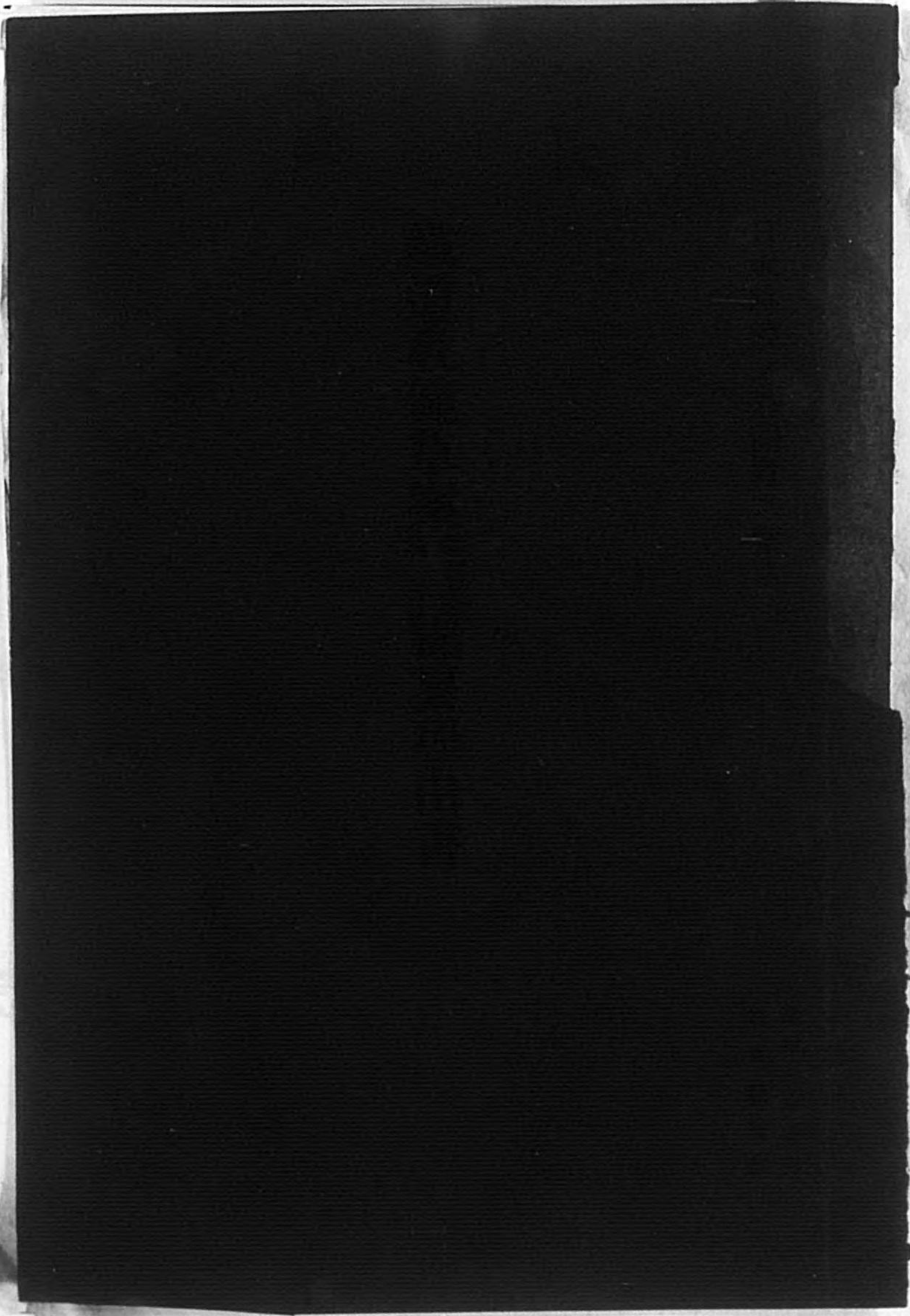
- 一、編纂案一般ノ要領及編纂案ノ要點ニ關シテハ昭和七年六月編纂案ノ鐵道教範草案總則及測量編纂案理由書ニ據ル
- 二、編纂案ニ方リ特ニ著意スル事項左ノ如シ
- 一、主トシテ軍用鐵道建設ニ際シテ急造スル鐵道橋ノ架設及破壞セラレタル鐵道橋ノ應急修理ノ方法ヲ記述シ作業ヲシテ神速機敏ナル作戦ノ要求ニ合致セシムルコトニ勉ム
- 二、編纂案ノ様式ハ勉メテ既ニ編纂案セラレシモノニ準セシムル外架橋教範ト連繫セシム
- 三、勉メテ平易簡明ナラシメ理解ヲ容易ニスルト共ニ用語ハ架橋教範ト統一ス

1 Dec. 2964 Evid.

(2 of 2)

Folder 1

(1082)



鐵道教範草案編纂理由書

- 一 本理由書ハ今次鐵道教範草案ノ編纂ニ方リ採用セル編纂一般ノ要領及理由ノ概要ヲ記述ス

編纂一般ノ要領

- 一 鐵道ニ關スル教育ハ從來鐵道聯隊長若ハ交通兵團長ノ規定セル教育書類ニ據リ之ヲ實施シツツアリシモ大戰後ニ於ケル軍事ノ趨勢ト從來ノ經驗トニ鑑ミ又器材及裝備ノ改定ニ順應シ茲ニ鐵道教範草案ヲ編纂ス
- 二 鐵道ノ教育課目ハ頗ル廣汎ナルヲ以テ本教範草案ハ左ノ數篇ニ分冊シ逐次編纂ス
總則及測量
上部建築

路盤

鐵道橋

停車場設備

運轉

輕便鐵道(輕便鐵道教範草案ヲ改編ス)

三 編纂ニ方リテ考慮セシ事項左ノ如シ

- 一 現制ノ鐵道隊ノ編制、裝備及器材ヲ基礎トスト雖將來ニ於ケル此等ニ關スル改定ヲモ願慮シ之ヲ記述ス
- 二 單線ノ場合ニ於ケル主トシテ一米四三五軌間ノ鐵道ニ就キ記述シ一米〇六七軌間ノモノニ關シテハ必要ナル事項ヲ之ニ加味シ其他ノモノニ在リテハ勉メテ之ヲ準用シ得シム
- 三 作業部隊ノ編成、器材及鐵道ノ設計並其基礎タルヘキ公式、係數及鐵道構築ノ

範例等ハ最モ適當ト認ムル一例ヲ示シ器材ノ構造、機能及取扱ニ關シテハ教育上必要ナル最小限度ニ止ム

編纂ノ要點及理由ノ概要

全般ニ關スル事項

一 練成ノ主眼ニ就テ

本教範草案ハ教育ノ順序トシテ軍用ニ供セラルル普通鐵道ニ關シ基本的事項ヲ記述セリト雖戰時鐵道隊ノ使用ニ鑑ミルトキハ戰場又ハ其附近ノ混亂シ且危險ナル狀況下ニ而モ器材ノ補充、取得困難ナル環境ニ於テ迅速ニ鐵道作業ヲ實施スル場合多カ
ルヘク從テ之カ作業ノ實施ニ方リテハ能ク鐵道使用ノ目的、環境、器材及地形等ニ鑑ミ修得セシ基本的事項ヲ基礎トシ遺憾ナク之ヲ活用シ以テ軍ノ要求ヲ充足スルコト肝要ナリ此見地ヨリ鐵道隊練成ノ主眼モ亦茲ニ存スヘキコトヲ明ニス

二 技術ヲシテ戰術上ノ要求ニ合致セシムルコトニ就テ

技術ヲシテ常ニ戰術上ノ要求ニ合致セシメ精巧ナル器材ノ性能ト進歩セル技術ノ效果トヲ發揮シ鐵道作業ヲシテ能ク狀況ニ適合セシメ苟モ技術ニ偏シテ作戰ノ要求ヲ阻害シ或ハ作戰ノミニ藉口シテ技術ヲ輕視スルノ弊ニ陥ルカ如キコトナカラシメ以テ國軍ノ神速機敏ナル作戰ノ要求ヲ充足スルコトニ勉ム

三 精神的訓練ノ必要ニ就テ

鐵道ノ業務ニ服スル者ハ長期間ニ互リ晝夜不斷ノ奮勵ヲ要スルノミナラス屢々獨立シテ任務ニ服シ而モ個人ノ實施スル業務ト雖作業ノ成果ニ重大ナル影響ヲ及スコト多キヲ以テ特ニ精神的訓練ニ重キヲ置キ旺盛ナル責任觀念ト耐忍持久ノ意氣トヲ以テ作業ヲ實施セシムルコトニ勉ム

鐵道教範草案

總則及
測量

總則

一 鐵道教育ノ目的ハ指揮官及兵ヲ訓練シテ諸種ノ狀況ニ應シ完全ニ其任務ヲ遂行シ得ヘキ鐵道ニ關スル技能ヲ修得セシムルニ在ルコトヲ示ス(第一)

二 鐵道ノ整備竝運用ノ適否ハ軍ノ勝敗ニ影響スルコトアルヲ以テ之カ業務ニ服スル者ハ常ニ鐵道ノ整備竝運用ノ的確ヲ期スルト共ニ鐵道ノ技術的措置ヲシテ能ク作戰上ノ要求ニ適應セシメサルヘカラサルコトヲ明示ス(第二)

三 鐵道ノ運用竝之ニ伴フ諸作業ハ目的、狀況ニ適應シ且迅速確實ニ所期ノ輸送ヲ實施スルヲ主眼トシテ其方法ヲ決定スヘキコトヲ高唱ス(第三)

四 鐵道業務ニ於ケル建設、修理等ノ諸作業ハ勿論輸送ニ關スル諸作業ト雖周到綿密ナル準備アリテ始メテ其實施ノ的確ヲ期シ得ヘシ特ニ此等ノ作業ハ多數器材ノ收

集、整備ヲ要スルニ於テ然リ故ニ鐵道ノ業務ニ服スル者ハ常ニ豫メ諸般ノ準備ヲ完全ナラシムルノ重要ナル所以ヲ高唱ス(第四)

五 鐵道隊ノ任務、狀況等ニ鑑ミ鐵道隊練成ノ主眼ヲ明示ス(第五)

六 鐵道業務ニ服スル者ハ長期間ニ互リ晝夜不斷ノ劇務ニ從事スルヲ要スルノミナラス獨立シテ任務ニ服シ而モ個人ノ實施スル業務ト雖作業ノ成果ニ大ナル影響ヲ及スヲ以テ特ニ持久力ノ涵養並精神的訓練ノ重要ナル所以ヲ高唱ス(第六)

七 鐵道業務ハ常ニ器材ト密接ナル關係ヲ有シ而モ其補充、整備ハ困難ヲ伴フコト多キヲ以テ能ク器材ヲ愛護節用スルト共ニ保存、加修ヲ誤ラシメサルコトヲ要求ス(第七)

八 本草案ニ記述セル鐵道ノ種類ヲ明示ス(第八)
其標準左ノ如シ

軌間一米四三五、一米〇六七等ノ鐵道ヲ普通鐵道ト謂ヒ軌間零米七五、零米六〇

等ノモノヲ輕便鐵道ト謂フ又軌間一米〇六七ノモノヲ準軌、之ヨリ廣キモノヲ廣軌、狹キモノヲ狹軌ト謂フ

測量

通則

一 鐵道測量ノ目的ヲ示シ其方法ハ鐵道使用ノ目的並狀況ニ應シ機宜ニ適セシムヘキコトヲ要求ス(第九)

二 鐵道建設ノ設計ニ關シ作戰上並技術上考慮スヘキ要件ヲ示ス(第十)

- 一 鐵道ノ發起點、終末點及主要ナル通過點ハ高級指揮官ヨリ指示セラルルモ此間ニ於テ水路並道路トノ連絡ヲ便ニシ緊要ナル道路ノ交通ヲ妨害スルコトナク敵火ヲ避ケ爲シ得ル限り敵眼ニ遮蔽シ且鐵道ノ守備ヲ容易ナラシムルコトニ著意スル

コト

二 工事ヲ簡單容易ナラシムルニハ障礙物ノ超越ヲ少クシ且線路ヲ地形ニ適應セシムルコト

三 動力ノ消費少クシテ輸送效程ヲ大ナラシムルニハ線路ハ成ルヘク捷路ヲ採リ其勾配ヲ緩ニシ曲半徑ヲ大ニシ且此等ノ配合ヲ適當ニシ又停車場並給炭水場ノ配置ヲ適當ナラシムルコト

四 線路ノ維持ヲ容易ナラシムルニハ天候、氣象ニ對スル防護ヲ完全ニシ構築物料ノ選擇ヲ誤ルコトナク且保線ノ便ヲ圖ルコト

三 鐵道測量ノ區分、方法ヲ定ム(第十一)

四 鐵道測量ノ成果ハ鐵道ノ價值ヲ左右スルコト甚タ大ニシテ其良否ハ一ニ測量實施者ノ手腕ニ存スト謂フモ過言ナラス而シテ測手ハ通常幹部之ニ當ルヲ以テ特ニ幹部ノ技能養成ヲ要求ス(第十二)

測量實施ノ良否、遲速ハ其助手ノ伎倆ニ俟ツモノ少カラサルヲ以テ測量助手タルヘ

キ兵ノ教育モ亦忽セニスヘカラサルハ勿論ナリ

五 鐵道測量ニ關スル重要ナル用語ノ意義ヲ一括シテ記述ス(第十三)

測量ヲ實施スル爲測量器材ヲ据エ附クル點ヲ測站ト謂ヒ位置又ハ位置標高ヲ決定スル爲被視器材ヲ置ク點ヲ測點ト謂フコトアリト雖測站ノ字義明瞭ナラサルト測站モ亦測點ノ一種トナルコトアルヲ以テ用語ノ簡明ヲ圖ル爲本草案ノ如ク定メタリ
 定點ハ「水準據點」「水準基標」「水準據標」等ノ名稱アルモ慣例ニ依リ「定點」ト定ム
 曲中長ハ「正矢長」又ハ「曲中距」ト稱スルコトアルモ慣例及輕便鐵道教範草案ノ用語ニ基キ「曲中長」ト定ム

六 測量篇記述ノ範圍並準用ノ標準ヲ明示ス而シテ輕便鐵道ノ測量ハ普通鐵道測量ノ方式ニ準シテ簡易ニ之ヲ行ヒ得ルモ其詳細ハ輕便鐵道篇ニ記述スルコトトシ本篇ニハ普通鐵道ニ關スルモノト共ニ記述スルヲ便トスル事項ノミヲ記述ス(第十四)

第一篇 基本

第一章 鐵道ノ測量及設計ニ影響スル要素

第一節 運行

第一款 勾配

- 一 鐵道線路ノ勾配ハ勉メテ之ヲ緩ナラシムヘキ所以ヲ記述ス(第十五)
- 線路ノ兩方向ヨリ殆ト同一ナル重量ヲ有スル列車ヲ運行スルトキ其勾配ノ正切千分數Sト水平直線線路ノ走行抵抗Wトノ關係カ $\frac{W}{S} \approx 1000$ ナル場合ニ於テハ其勾配ヲ登行スルニ要スル牽引力ノ増加量ハ降行スル場合ニ於ケル牽引力ノ減少量ニ相等シキカ或ハ之ヨリ小ニシテ走行モ亦安全ナリ故ニ線路ノ勾配ハ $\frac{W}{S} \approx 1000$ 以下ナラシムルヲ得ハ運轉上甚タ有利ナリ

二 列車ノ制限抵抗並線路ノ制限勾配ノ意義ヲ記述ス(第十六)

詳細ハ本章第三節ニ於テ之ヲ述フ

- 三 平均勾配カ制限勾配ヨリ急ナルトキハ此區間ニ於ケル各局地ノ勾配ハ制限勾配ヨリ緩ナラシムルコト能ハサルヲ以テ圖上ニ於ケル線路ノ選定等ニ方リテハ豫メ之ヲ避クヘキコトヲ要求ス(第十七)

- 四 地形ニ依リ線路ノ某部分ニ於テハ制限勾配ヨリ急ナル勾配ヲ避ケ難キ場合ヲ生スヘシ此ノ如キ場合ニ於テモ其勾配部ノ長サ大ナラサルトキハ列車ノ惰力ヲ利用シテ登リ勾配ヲ突進シ得ルコトヲ記述ス(第十八)

突進ヲ要スル勾配ハ成ルヘク之ヲ避クルヲ要スルノミナラス勾配部ヲ曲線部中ニ置キ或ハ列車ニ惰力ヲ附スルノ餘地ナキ地點ニ設クルカ如キハ共ニ不可ナリトス

- 五 勾配變換點ニ於テ相隣接スル勾配ノ外角大ナル場合ニハ運行車輛ニ劇動ヲ生スヘキヲ以テ之ヲ緩和スル爲縦曲線ヲ挿入スヘキコトヲ述フ然レトモ軍用鐵道ニ在リテ

ハ通常列車ノ運行速度大ナラサルヲ以テ狀況ニ依リ之ヲ省略スル場合アルヲ示セリ
 縱曲線ノ挿入ヲ爲ササル場合ニ於テハ軌道ノ敷設並爾後ノ保線作業ニ於テ勉メテ勾
 配變換部ノ緩和ヲ圖ルヘキモノトス(第十九)

六 制限勾配ハ輪轉器材及列車ノ大サ並列車ノ運行速度ノ異ナル毎ニ之ヲ算定スルモ
 ノトス而シテ一列車ハ一箇ノ機關車及數箇ノ車輛ヲ以テ編成スルモノトシ計算スヘ
 キモノトス

列車重量ノ差異ハ列車抵抗ニ差異ヲ生セシムルヲ以テ列車ノ運行方向ニ依リ列車重
 量ニ差異アル場合ニ於テハ夫々列車ノ運行方向ニ應スル制限勾配ヲ定メ以テ線路選
 定上地形ノ利用ヲ有利ナラシムルヲ要ス(第二十)

第一款 方向

一 線路ノ方向ノ成立ヲ記述ス曲半徑小ナルハ列車ノ抵抗ヲ増大シ又曲半徑過度ニ大

ナルハ徒ラニ曲線長ヲ大ナラシメ建築、保線ニ不利ナルヲ以テ共ニ之ヲ避ケサルヘ
 カラサルコトヲ示ス(第二十一)

二 直線ト曲線トノ接続部ニハ車輪ト軌條トノ激突ヲ緩和スル爲緩和曲線ヲ挿入スヘ
 キコトヲ述フ然レトモ軍用鐵道ニ在リテハ通常列車ノ運行速度大ナラサルヲ以テ狀
 況ニ依リ之ヲ省略スル場合アルコトヲ示セリ(第二十二)

緩和曲線ノ挿入ヲ爲ササル場合ニ於テハ軌道ノ敷設並爾後ノ保線作業ニ於テ勉メテ
 方向變換ノ緩和ヲ圖ルヘキモノトス

三 反向曲線ニ於テハ車輪ト軌條トノ摩軋一層甚シキヲ以テ其緩和手段トシテ緩和曲
 線ノ外尙若干ノ直線部ヲ存置スヘキコトヲ要求ス而シテ其長サハ機關車働輪ノ輪軸
 距ヨリ大ナラシムルヲ本則トシ且適宜ノ整數タラシムル爲十米ヲ最小限ト定ム(第
 二十三)

第二款 停車場

- 一 停車場位置決定ノ要旨ヲ示ス(第二十五、第二十六)
- 鐵道線路選定ニ方リテハ停車場ノ位置ニ依リ線路ニ變化ヲ來スコト少カラサルヲ以テ其位置ハ豫メ概定スルヲ有利トス
- 二 行違停車場相互ノ間隔決定ノ要旨ヲ示ス而シテ其標準間隔ハ日々十數列車ヲ往復運行セシムルヲ基準トシ之ヲ定ム(第二十七)
- 三 給水停車場設定ノ要旨ヲ示ス(第二十八)
- 給水停車場トハ給水場ヲ設クル停車場ヲ謂フ
- 四 給炭場ヲ通常給水停車場ニ併置スルハ該停車場ニ於テ給水、給炭ヲ同時ニ實施シ得之カ爲人員ト時間トヲ節約シ得ルノ利アルヲ以テナリ(第二十九)
- 五 停車場内軌道ノ有效長ノ標準ヲ示ス(第三十)

本線路トハ列車ノ運轉ニ常用スル線路ヲ謂ヒ側線トハ本線路ニアラサル線路ヲ謂フ
有效長トハ他ノ線路ノ交通ヲ妨害スルコトナク車輛ヲ停止セシメ得ル軌道ノ全長ヲ謂フ

- 六 停車場幅決定ノ要旨ヲ示ス(第三十一)

第二節 地形

- 一 地形ニ應スル線路選定ノ概念ヲ記述ス(第三十二)
- 平坦地ニ於テハ河川等ヲ横斷スルニ容易ナル地點ヲ考慮シテ線路ノ通過地ヲ選定スヘキモ第二十五ニ據リ停車場ヲ設クヘキ位置ヲモ考慮スヘキコト勿論ナリ
- 二 運轉ノ安全ヲ期スル爲鐵道線路相互ノ交叉法並分岐法ヲ定ム(第三十三)
- 三 鐵道線路ト道路トノ相互交通ノ安全ヲ期スル爲兩者ノ交叉法ヲ定ム之カ爲要スレ
- ハ在來ノ道路ヲ變更スルヲ要スルコトアリ而シテ主要ナル道路ハ勿論其他ノ道路ト

雖其踏切部ハ軌道ト直角ニ交叉セシムルヲ本則トス(第三十四)

四 架橋點選定ノ要領ヲ示ス(第三十五)

橋軸線ト流線トノ交叉角ノ限度ヲ定メタルハ橋梁ノ結構ヲシテ複雑ナラシメサル爲ナリ

五 沼澤地、溪谷等ノ通過ニ方リテハ架橋スルヲ有利トスルコトアルヲ以テ之カ注意ヲ喚起ス而シテ之カ決定ニ方リテハ工事ノ難易、材料ノ有無及線路ノ維持等ヲ比較シテ何レヲ採用スヘキヤヲ判定スルモノトス(第三十六)

六 山岳地帯ノ通過ニ方リ採ルヘキ手段ニ就キ記述ス(第三十七乃至第三十九)

七 施工基面選定ノ要件ヲ記述ス(第四十)

八 竝設線路ノ間隔ヲ定ム(第四十一)

第三節 制限勾配ノ算定法

一 制限抵抗ノ算定法ヲ記述ス(第四十二)

線路ノ最急勾配ハ其線路ニ於ケル運行列車ノ重量ニ依リ變化スヘキモノニシテ結局制限抵抗ニ依リ定マルモノトス

列車抵抗ニハ數種アルモ其主ナルモノハ走行抵抗、曲線抵抗及勾配抵抗ナルヲ以テ此三種ニ就キテノミ記述セリ而シテ列車重量毎噸ニ對スル走行、曲線及勾配各抵抗ノ合計ヲ合抵抗ト稱シ一列車ノ重量ニ對スルモノヲ總抵抗ト稱呼セリ

二 制限勾配ノ算定法ヲ記述ス(第四十三)

三 走行抵抗及曲線抵抗ノ概數値ヲ表示ス(第四十四)

四 突進ヲ要スル勾配ノ算定法ヲ記述ス(第四十五)

第二章 基本作業

第一節 地點及線ノ標示

- 一 地點標示ノ必要ヲ記述ス(第四十六)
- 二 地點標示ノ方法ヲ記述ス(第四十七)
- 三 標柱ノ植立法ヲ記述ス(第四十八)
- 四 杭ニ依ル地點ノ標示法ヲ記述ス(第四十九)
- 五 方向線標示ノ方法ヲ記述ス(第五十)
- 六 標柱ニ依ル直線標示ノ要領ヲ記述ス(第五十一)
- 七 杭ニ依ル直線標示ノ要領ヲ記述ス(第五十二)

第二節 角ノ測定

第一款 圓筒測角器ニ依ル法

圓筒測角器ニ依ル水平角測定ノ方法ヲ記述ス(第五十三)

第二款 傾斜儀ニ依ル法

傾斜儀ニ依ル垂直角又ハ傾斜ノ測定法ヲ記述シ併セテ繰出標尺ノ使用法ヲ説明ス(第五十四)

第三款 携帶測角器ニ依ル法

携帶測角器ニ依ル方位角、水平角及傾斜角ノ測定法ヲ記述ス(第五十五乃至第五十八)

第四款 經緯儀ニ依ル法

經緯儀ニ依ル水平角、垂直角及方位角ノ測定法ヲ記述ス(第五十九乃至第六十二)

第三節 距離測量

距離測量中目測、步測等ニ依ル方法ハ小銃、輕機關銃、拳銃射擊教範ニ據ルコトトシ
本草案ニハ之ヲ記述セス

第一款 直接距離測量

- 一 測鎖測量ノ概要ヲ記述ス(第六十二、第六十四)
 - 二 五十米測索ニ依ル測量法竝五十米測索取扱上ノ注意ヲ記述ス(第六十五)
 - 三 障礙ヲ超越シテ行フ距離測量法ヲ記述ス(第六十六)
- 本條ニ示ス測索ハ五十米測索其他伸縮少キ線條ヲ總括的ニ稱呼セルモノトス

第二款 間接距離測量

- 一 間接距離測量ノ利害ヲ述ヘ又計算ヲ要スル場合ノ公式竝算定ハ鐵道測量補助表ヲ利用スヘキコトヲ示ス(第六十七)
- 二 「スタヂア」測量ノ方法竝注意事項ヲ記述シ併セテ水準標尺ノ立テ方ヲ説明ス(第六十八、第六十九)

- 三 急造「スタヂア」ノ製作法竝之ニ依ル測定法ヲ記述ス(第七十)
- 四 障礙ヲ超越シテ行フ距離測量法ヲ記述ス(第七十一)

第四節 水準測量

第一款 直接水準測量

- 一 眼鏡水準儀ニ依ル測量法ヲ記述ス(第七十二、第七十三)
- 傾斜儀、經緯儀及測斜儀等ニ依ル測量法ハ本法ヲ準用スルモノトス
- 二 障礙ヲ超越シテ行フ水準測量法ヲ記述ス(第七十四)

第二款 間接水準測量

- 一 經緯儀ニ依ル測量法ヲ記述ス(第七十五)
- 傾斜儀ニ依ル測量法ハ本法ヲ準用スルモノトス

- 二 測斜儀ニ依ル測量法ヲ記述ス(第七十六)
- 三 携帶晴雨計ニ依ル測量法ヲ記述ス(第七十七)

第五節 零線ノ探求法

第一款 圖上ニ於ケル探求

- 一 圖上ニ於ケル零線ノ探求ノ方法ヲ記述ス(第七十八)
零線ノ探求ヲ標高大ナル點ヨリ始ムルヲ有利トスルハ高キ位置ノ既定點附近ニ於ケル線路ノ選定ハ低キ位置ノ既定點附近ニ於ケルモノヨリ困難ナルヲ通常トスルヲ以テナリ
- 二 零線ニ適應セル曲線ヲ圖上ニ選定描畫スル手段ヲ記述ス(第七十九)
- 三 地貌複雑ナル場所ニ於ケル線路ノ選定法ヲ記述ス(第八十)
- 四 第七十八乃至第八十二據ルコトナク圖上ニ線路ヲ經始シタル場合土工量ノ平均ニ

關シ研究スル方法ヲ記述ス(第八十一)

第二款 現地ニ於ケル探求

- 一 零線測量ノ方法ヲ記述ス(第八十二)
- 二 傾斜概ネ等齊ナル斜面ニシテ且開豁セル地形ニ於テ實施シ得ル零線測量ノ一法ヲ記述ス此方法ハ器械ノ整置回數ヲ減少シ從テ時間ヲ節約シ得ルノ利アリ(第八十三)

第六節 曲線函數ノ算定法

- 一 普通ノ角點ニ於ケル曲線函數ハ多クノ場合鐵道測量補助表ニ據リ其值ヲ求メ得ル如ク同表ヲ編纂セリ(第八十四)
- 二 補助角點ヲ設置シタル場合ニ於ケル曲線函數ノ算定法ヲ記述ス(第八十五)
- 三 複合曲線ニ於ケル曲線函數ノ算定法ヲ記述ス(第八十六)

第二篇 測量ノ實施

通則

- 一 鐵道ノ建設ニ關スル命令ニ包含セラレアル一般的事項ヲ紹介的ニ記述ス(第八十七)
- 鐵道部隊最高指揮官ハ高級指揮官ノ意圖ニ基キ作戰上ノ要求ヲ基礎トシ技術上ノ見地ヲ參酌シテ建設方針ヲ確定シ建設ニ關スル命令ヲ下達スルモノトス
- 二 建設指揮官ハ建設ニ關スル鐵道部隊最高指揮官ノ命令ニ基キ建築規定ヲ設ケ選定測量ヲ實施セシムルコトヲ記述ス(第八十八)
- 三 建築限界決定ノ方法ニ就キ記述ス(第八十九)
- 四 選定測量ノ結果ニ基キ經始測量ヲ實施スルコトヲ記述ス(第九十)
- 五 測量地域ノ區分竝其境界ニ關シ記述ス(第九十一)

- 六 線路ノ延長小ナル場合ニ於ケル測量ニ關シ記述ス(第九十二)
- 七 測量ノ精度ニ關シ記述ス(第九十三)
- 八 測量ノ結果ニ關スル注意事項ヲ記述ス(第九十四)
- 九 測量上ノ誤差、誤謬ノ排除ニ關シ記述ス(第九十五)
- 十 測量隊ノ編成法ニ關シ記述ス(第九十六、第九十七)
- 局地水準測量、線路探求及定點水準測量ヲ省略シ得ルハ地形平易ニシテ測量竝建設ヲ特ニ急速ナラシムル等ノ場合ナリ

第一章 測量諸隊ノ業務

第一節 選定測量ニ任スル部隊

第一款 隊長及班長

選定測量ニ任スル隊長及班長ノ業務ヲ規定ス(第九十八乃至第一百一)

第二款 水準班、探求班、定點班及製圖班

選定測量ニ任スル各班ノ業務ヲ規定ス(第一百二乃至第一百五)

第二節 經始測量ニ任スル部隊

第一款 隊長及班長

經始測量ニ任スル隊長及班長ノ業務ヲ規定ス(第一百六、第一百七)

特別測量ニ任スル隊長及班長ノ業務モ亦之ニ準スルモノトス

第二款 方向班、中心班、斷面班、補修班

及特別班

經始測量及特別測量ニ任スル各班ノ業務ヲ規定ス(第一百八乃至第一百十六)

第二章 選定測量

要則

一 選定測量ノ目的ヲ記述ス(第一百七)

選定測量トハ適當ナル線路ヲ地上ニ發見センカ爲行フ測量ヲ謂ヒ經始測量トハ選定シ得タル線路ヲ地上ニ經始センカ爲ノ測量ヲ謂フ

經始センカ爲測量ヲ行ヒ其測量ノ結果ハ經始ニ依リテ現レ經始ト測量トハ其間稍、混淆セル嫌ナキニアラサルモ經始トハ構築物ヲ設クル爲所望ノ標示ヲ爲スコトヲ謂ヒ測量トハ測量用器材ヲ用ヒテ所要ノ測定又ハ經始ヲ爲ス手段ヲ謂フ義ナリ

二 選定測量ヲ行フヘキ範圍及方法ハ第十一、第九十一、第九十二及第九十六其他一般ノ狀況ニ依リテ定ムヘキコト並參考資料ノ收集ニ關シ記述ス(第一百十八)

第一節 圖上ニ於ケル線路ノ選定

- 一 線路ノ選定ニ方リテハ先ツ十分ニ圖上研究ヲ實施スルノ必要ヲ力説ス(第一百九)

圖上ニ於ケル線路ノ選定ハ必スシモ測量作業トハ謂ヒ難キモ其結果ハ直ニ測量作業ニ大ナル影響ヲ及スヲ以テ之ヲ選定測量ノ一部ト看做セリ

- 二 圖上ニ於ケル線路選定ニ方リ第一ニ實施スヘキ作業ニ就キ記述ス(第一百二十)
- 三 圖上ニ於ケル線路概定ノ基礎的方法ヲ記述ス(第一百二十一)
- 四 岡阜地、山地等ニ於ケル線路中心線ヲ求ムル方法ヲ記述ス(第一百二十二)
- 五 零線ノ性質ヲ述ヘ之ニ依リ中心線ヲ決定スル方法ヲ記述ス(第一百二十三)
- 六 線路ノ標示ニ關シ記述ス(第一百二十四)
- 七 平面的設計後更ニ垂直的設計ニ就キ研究スヘキコトヲ記述ス而シテ之カ研究ニ方

リテハ第八十一ヲ應用スヘキ場合少カラサルヲ示ス(第一百二十五)

- 八 縱斷面圖ノ調製特ニ縱斷面圖上ニ於テ施工基面ヲ設計スル方法ヲ記述ス(第一百二十六)

第二節 現地ニ於ケル線路ノ選定

要 旨

現地ニ於ケル線路選定ノ一般經過及其目的ヲ述ヘ且選定線路平面圖及定點ノ價值ヲ記述ス(第一百二十七、第一百二十八)

第一款 踏 查

- 一 踏查ノ目的ヲ記述ス(第一百二十九)
- 二 踏查ノ方法ヲ記述ス(第一百三十)

- 三 踏査上ノ注意事項ヲ記述ス(第三百二十一)
- 四 踏査ノ際併セテ調査スヘキ事項ヲ記述ス(第三百二十二)

第二款 局地水準測量

- 一 局地水準測量ノ目的、價值竝之ヲ行フヘキ場合ヲ記述ス(第三百二十三、第三百三十四)
- 二 局地水準測量ノ方法ヲ記述ス(第三百三十五)
- 三 要點杭ノ設置ニ關シ記述ス(第三百三十六)
- 四 局地水準測量ノ記録ニ關シ記述ス(第三百三十七)

第三款 線路探求

- 一 線路探求ノ目的ヲ記述ス(第三百三十八)

二 線路探求ニ關スル作業中主要事項タル零線測量ニ於ケル勾配減少ニ就キ記述ス(第三百二十九)

三 平坦地ニ於ケル線路探求ノ要領ヲ記述ス(第四百十)

四 岡阜地ニ於ケル線路探求特ニ零線測量ニ就キ記述ス(第四百十一)

零線測量ハ第七十八ニ述ヘタル如ク標高大ナル位置ヨリ低キ方向ニ向ヒ實施スルヲ有利トス

零點杭ハ連續番號ヲ附スルヲ通常トスルモ高地ヲ降リツツ零線測量ヲ行ヒ又幾何モナクシテ更ニ高地アルカ如キ場合ニ於テハ其低地ニ於ケル兩地域ノ零點杭ニ混雜ヲ來ス虞ナシトセサルヲ以テ特ニ此點ニ注意スルコト肝要ナリ又零點杭ノ間隔竝其土地ノ標高ヲ求メ置クトキハ平面圖調製ニ方リ便アルノミナラス平面圖ノ價值ヲ増大スルモノトス

五 線路探求ニ際シ所望ノ勾配ニ適應セル數多ノ地帶ヲ發見セル場合ニ於テハ工事量

少ク且小ナル曲半徑ヲ用フルコト少キモノヲ採用スルヲ一般ニ有利トス(第四百四十二)

六 線路ノ圖上選定ヲ爲スニ適スル地圖ヲ有セサル場合ニ於テハ先ツ線路ノ通過スヘキ豫想地帯ヲ少クモ一萬分ノ一以上ノ梯尺ヲ以テ曲線式ニ依リ測圖シ十分ナル研究ヲ遂ケタル後線路探求ヲ爲スヲ可トス此際空中寫真測量ヲ應用シ得レハ甚タ有利ナリ(第四百四十三)

第四款 定點水準測量

- 一 定點水準測量ノ目的竝定點ノ設置法ニ關シ記述ス(第四百四十四)
- 二 定點水準測量ノ方法及誤差ノ定限ヲ記述ス(第四百四十五)
- 三 定點水準測量ニ於ケル標高ノ基準ニ關シ記述ス(第四百四十六)
- 四 定點水準測量ニ於ケル記錄ニ關シ記述ス(第四百四十七)

第五款 平面測量

- 一 平面測量ノ目的ヲ記述ス(第四百四十八)
本作業ニ於テ調製スル平面圖ハ第三章第一節第六款及第四章第二節ニ示ス如ク設計書ト爲スノミナラス線路完成後ニ於テモ基準ノ圖面タルヘキヲ以テ其調製ハ爲シ得ル限リ精密ヲ期スヘキモノトス
- 二 平面測量ノ方法ヲ記述ス(第四百四十九)
- 三 平面圖上ニ於ケル線路ノ平面设计ニ關シ記述ス(第四百五十)
設計ニ方リテハ第七十八及第七十九ヲ準用スルモノニシテ鉛筆作業ニテ足ルモノトス
- 四 平面圖調製上ノ注意事項ヲ記述ス(第四百五十一)
- 五 線路ノ平面设计後其垂直設計ヲ爲シ相互ニ比較研究スヘキコトヲ記述ス(第四百五十二)

十二)

六 選定線路平面圖ノ點檢及整備ニ關シ記述ス(第百五十三)

第三章 經始測量

要則

經始測量ノ目的及著眼ヲ記述ス(第百五十四、第百五十五)

第一節 線路ノ經始

要旨

線路經始ノ一般經過ヲ記述ス(第百五十六)

第一款 直線及角點測量

一 直線及角點測量ノ目的ヲ記述ス(第百五十七)

二 直線線路ノ中心線ヲ現地ニ移ス方法ヲ記述ス(第百五十八)

三 長キ直線部ニ於ケル處置及中間方向杭ノ設置法ヲ記述ス(第百五十九)

四 角點ヲ現地ニ移ス方法ヲ記述ス(第百六十)

五 二直線ノ經始ニ基キ角點ヲ設置スル方法並角點測量ノ記錄ニ關シ記述ス(第百六十一)

十一)

角點ヲ現地ニ決定スルヲ不利トスル場合トハ交角小ニシテ角點ト曲線主點トノ距離

遠大ナルカ如キ場合特ニ森林中ニ於ケルカ如キ場合ヲ謂フ

六 線路探求並平面圖ノ調製ヲ省略セル地域ニ於ケル角點設置法ヲ記述ス(第百六十

二)

此ノ如キ場合ハ通常地形平易ナル部分ナルヲ以テ現地ニ應シテ角點ヲ定ムルコトハ甚シク困難ニアラス然レトモ稍々複雑セル地形ニ在リテハ相當ノ困難ヲ伴フヲ以テ

幹部ハ能ク其要領ヲ會得シアルコト肝要ナリ輕便鐵道ニ於ケル角點ノ設置ハ通常此方法ニ依ルヘキヲ以テ一層然リトス

第二款 曲線測量

- 一 曲線測量ノ目的ヲ記述ス(第百六十三)
- 二 曲線主點ノ經始法ヲ記述ス(第百六十四)

曲線主點中曲中點ハ曲始曲終兩點ニ測量器械ヲ整置シ得サルカ又ハ曲線長大(概ネ三百米以上)ナル場合ノ外ハ必スシモ設置スルヲ要セサルモ其取捨ハ各種ノ狀況ニ依リ判別困難ナルヲ以テ之ヲ設置スルモノトシテ記述セリ測量實施ニ方リテハ狀況ニ依リ要スレハ之ヲ省略スルコトヲ得
- 三 補助角點ヲ設置シタル場合及複合曲線ノ場合ニ於ケル曲線主點ノ經始ニ關シ記述ス(第百六十五)

四 曲線中間點ノ設置竝曲線測量ノ記錄ニ關シ記述ス(第百六十六)

測量實施ニ方リテハ曲線測量ニ任スル班ト中心距離測量ニ任スル班トハ概ネ相前後シテ作業シアルヲ以テ通常曲始點ノ中心距離ヲ知り得ルモノトス此場合ニ於ケル曲線中間點ハ其中心距離ヲ每二十米單位ノ整數位置ニ在ラシムルヲ將來ノ爲便ナリトス然レトモ曲始點ノ中心距離容易ニ決定セサル場合ニ於テハ曲始點ヨリ每二十米ニ曲線中間點ヲ經始シ曲線ノ終ニ端數ノ距離ヲ殘ス如ク實施スルモノトス

五 曲線中間點經始法ノ種類ヲ記述ス(第百六十七)

六 曲線中間點經始法ノ細部ヲ記述ス(第百六十八乃至第百七十一)

七 緩和曲線ノ經始法ヲ記述ス(第百七十二、第百七十三)

緩和曲線ノ挿入法ニ概ネ左ノ三方法アリ

- 一 圓曲線ノ兩切線ヲ曲線ノ内方ニ若干移動セシメ之ニ切スル原曲線ト同一曲半徑ノ圓曲線ト原切線トノ間ニ緩和曲線ヲ設ク(第一法)

二 緩和曲線ニ接スル圓曲線ノ一部ヲ曲半徑小ナル圓曲線ト爲シ之ト原切線トノ間ニ緩和曲線ヲ設ク(第二法)

三 圓ノ中心ヲ移動スルコトナク圓曲線ノ曲半徑ヲ若干減少シ之ト原切線トノ間ニ緩和曲線ヲ設ク(第三法)

以上ノ内第一法ハ學理上最モ適當ニシテ第二法ハ既設曲線軌道ニ於テ其角點ヲ移動スルヲ不利トスル場合等ニ用ヒ第三法ハ全曲線ノ曲半徑ヲ小ナラシムル不利アルモ原圓曲線ト新圓曲線トハ平行ニシテ經始作業ニ便ナルヲ以テ本草案ニ於テハ之ヲ採用セリ

緩和曲線長ハ餘高ノ移行長ニ一致セシムルヲ本則トスヘキモ實際上ノ便ヲ顧慮シ曲半徑ノ大小ニ應シ餘高ノ移行長ニ近似セル二十乃至四十米トセリ

緩和曲線及圓曲線ノ經始ハ緩和曲線設置後新圓曲線ニ應スル曲線中間點ヲ經始スルヲ本則トスルモ諸元ノ計算繁雜ナルヲ以テ原圓曲線ヲ假リニ經始シ後之ヲ移動スル

方法ヲ採用セリ

第三款 中心距離測量

一 中心距離測量ノ目的ヲ記述ス(第七十四)

二 中心杭ノ設置法ヲ記述ス(第七十五)

直線部ニ於ケル中心杭ハ其相互ノ距離小ナルニ從ヒ土量ノ計算、下部建築作業ニ便ナルモ之カ爲杭ノ準備ト植杭ノ手數トヲ要スルコト大ナルヲ以テ五十米測索ニ依リ一回ノ測定ニテ決定シ得ル毎五十米ヲ標準トシ地形上要スレハ毎二十米ニ設置スルコトトス

三 中間杭ノ設置法ヲ記述ス(第七十六)

四 杆標及停車場標ノ設置ニ關シ記述ス(第七十七)

五 線路中心距離ノ伸縮ニ關スル處置ヲ記述ス(第七十八)

第四款 縱斷面測量

- 一 縱斷面測量ノ目的ヲ記述ス(第百七十九)
- 二 縱斷面測量ノ方法及記録ニ關シ記述ス(第百八十)
- 三 線路縱斷面圖ノ調製ニ關シ記述ス(第百八十一、第百八十二)
- 四 縱曲線ノ設計ニ關シ記述ス(第百八十三)
- 五 勾配補整ノ設計ニ關シ記述ス(第百八十四)

第五款 橫斷面測量

- 一 橫斷面測量ノ目的ヲ記述ス(第百八十五)
- 二 橫斷面測量ノ方法及記録ニ關シ記述ス(第百八十六)
- 三 線路橫斷面圖ノ調製ニ關シ記述ス(第百八十七乃至第百八十九)

第六款 平面圖ノ整備及確認杭ノ設置

- 一 線路平面圖ノ調製ニ關シ記述ス(第百九十)
- 二 確認杭ノ設置並其記録ニ關シ記述ス(第百九十一、第百九十二)

第七款 特別點ノ測量

- 一 特別點ノ測量ノ必要及方法ニ關シ記述ス(第百九十三)
- 二 建築設計ノ爲ノ調査事項ニ關シ記述ス(第百九十四)

第二節 測量手簿及經始材料

- 一 本節ノ諸材料ハ選定測量ニ於テ必要ナルモノヲモ包含スルモノトス
- 二 測量手簿ノ用途、種類及記載例ヲ記述ス(第百九十五)

三 經始材料ニ就キ記述ス(第九十六乃至第二百二)

第四章 設計書ノ調製

設計書ノ種類及調製スヘキ書類等ニ關シ規定ス(第二百三乃至第二百九)

附録

其一 鐵道設計ニ關スル主要計算例

建築ニ關スル鐵道部隊最高指揮官ノ命令ニ示サル諸元ニ基キ建築規定ヲ設定スル場合或ハ鐵道ノ補修、修理等ニ際シ屢々必要トスル鐵道設計ニ關スル主要ナル計算法ヲ例示ス(第一乃至第十)

其二 測量器材及其用法

測量器材ノ一般取扱上ノ注意並重要ナル器材ニ就キ其取扱法及點檢、規正法ヲ記述ス(第一乃至第八十三)

其三 鐵道測量補助表

測量ノ經始及設計ニ方リ多クノ計算ヲ爲スニ代ヘ且之カ確實ヲ期センカ爲此等ニ必要ナル諸表ヲ輯録ス(別冊)

鐵道教範草案

總則及量編纂理由書

終

陸軍軍樂制八四頁廿六日以送式、並交互出書
 五軍 樂 制

保存期限

決裁指定

決行指定

政務次官 回付 決裁前連帶
 參與官 課名

決行(決裁)後
 回覽課名

受 番 領 號

貳第 一七三九號

起元應(課)名

教育總監部

名 鐵道敷設草案停置場設備

編纂要旨件

大臣

次官

政務次官

參與官

書記官

審案 筆記者

主務局長

高級副官

主務副官
 官房御用掛

主務課員

號番

貳 二五五號

連帶

主務局長

領受

昭和九年八月十五日

帶

大官房

領受

昭和九年八月廿五日

決行(決裁)後
 回覽

局長

局長

課長

課長

陸

軍

大臣ヨリ教育總監へ回春案

(陸普)

八月十日敬庶等三四回群
アリシ首題ノ件異存無之
ヲ以テ照會

陸普第五一二七號 昭和九年八月廿八日

Table with multiple columns containing faint text and stamps. The table appears to be a ledger or record book with various entries and official seals.

五軍 樂 隊

陸海軍軍樂隊ハ四月廿六日以後左ノ通交互出場ス

兵務

陸軍省 第一八三九號

教庶第二二四四號

鐵道教範草案 停車場設備 編纂要旨ノ件照會

昭和九年八月十一日

教育總監 眞崎甚三郎

陸軍大臣 林銑十郎殿

首題ノ件別紙ノ如ク致度ニ付意見承知致度

陸軍省 9.8.14 大臣官房

信

重松

陸軍省 9.8.14 255 陸軍

陸軍省 陸軍大臣官房

鐵道效範草案 停車場設備編纂要旨

- 一、編纂一般ノ要領及編纂ノ要點ニ關シテハ昭和七年六月編纂ノ鐵道效範草案^{總則及測量編纂理由書}ニ據ル
- 二、編纂ニ方リ特ニ著意^スキ事項左ノ如シ
一、簡易且最小ノ施設ヲ以テ軍隊及軍需品輸送ノ諸要求ヲ充足シ以テ神速機敏ナル作戰ニ應セラルルニ勉ム
- 二、停車場ノ利用、改築、修理ノ要領ヲモ記述シ作戰地^ニ在來ノ鐵道利用ニ遺憾ナカラシム
- 三、編纂ノ様式ハ勉メテ既ニ編纂セラレシモノニ準セシム
- 四、學理及細部ノ技術ニ關スルコトハ附録トシ本文ハ勉メテ平易簡明ナラシメ理解ヲ容易ニス

閱

陸軍省

四

十月三十日

放庶第ニ〇八九號

速射砲放育假規是案送付、件通牒

昭和十年十月十日 放育總監部庶務課長富永信政

陸軍省副官 牛島 滿殿

首題、圖書步兵聯隊ニ於テ速射砲放育考、爲左記、通送付ス

記

一部

兵部省ニテ取印ス

三六三

陸軍省 10.10.19 牛島 副官

10.10.19 288

軍

永永印

案

速射砲教育假規定

昭和十年十月
教育總監部

速射砲教育假規定目次

總則	一頁
第一篇 教練	三
通則	三
分隊	四
要則	四
第一節 基本	六
分隊ノ編成及隊形並分隊長以下ノ定位	六
繫駕及脫駕	九
行進	二
繫駕行進	二
脫駕行進	三

目次

陣地進入及變換	二〇
射擊	二〇
射擊用意及解除	二一
裝填、照準及發射	二二
射向、射角ノ修正及目標變換	二三
射擊中止、再興及停止	二三
第二節 戰闘	二四
要旨	二四
第一款 攻撃	二五
戰闘ノ爲ノ前進	二五
陣地進入及變換	二六
射擊	二六
第二款 防禦	二六

第三節 夜間ノ動作	二〇
第四節 戰闘間兵一般ノ心得	二〇
第二篇 射撃法	二一
第一章 射撃ニ關スル定説	二一
第一節 彈道	二二
第二節 射撃上天候、氣象ノ感及	二三
第三節 射彈ノ散布	二四
第四節 超過射撃及間隙射撃	二五
第五節 射撃效力	二五
第二章 射撃教育	二五
要則	二五
第一節 基本教育	二六
要旨	二六

第一款 射擊諸元ノ裝定及照準、擊發	四
第二款 射彈ノ觀測	五
第三款 射擊開始諸元ノ決定	五
第四款 射擊ノ修正	五
第五款 射擊豫習	五
第二節 準備射擊及戰闘射擊	五
第三節 射擊場ノ警戒及危害豫防	五
第三章 記錄及報告	六
附錄	六
其一 馭法	六
其二 照準具ノ點檢及規正	六
附表	六
第一 連射砲分隊戰闘(準備)射擊實施成績表	六

附圖 第二 連射砲小隊戰闘射擊實施表

- 第一 模型戰車の
- 第二 方向變換機
- 第三 鐵線卷

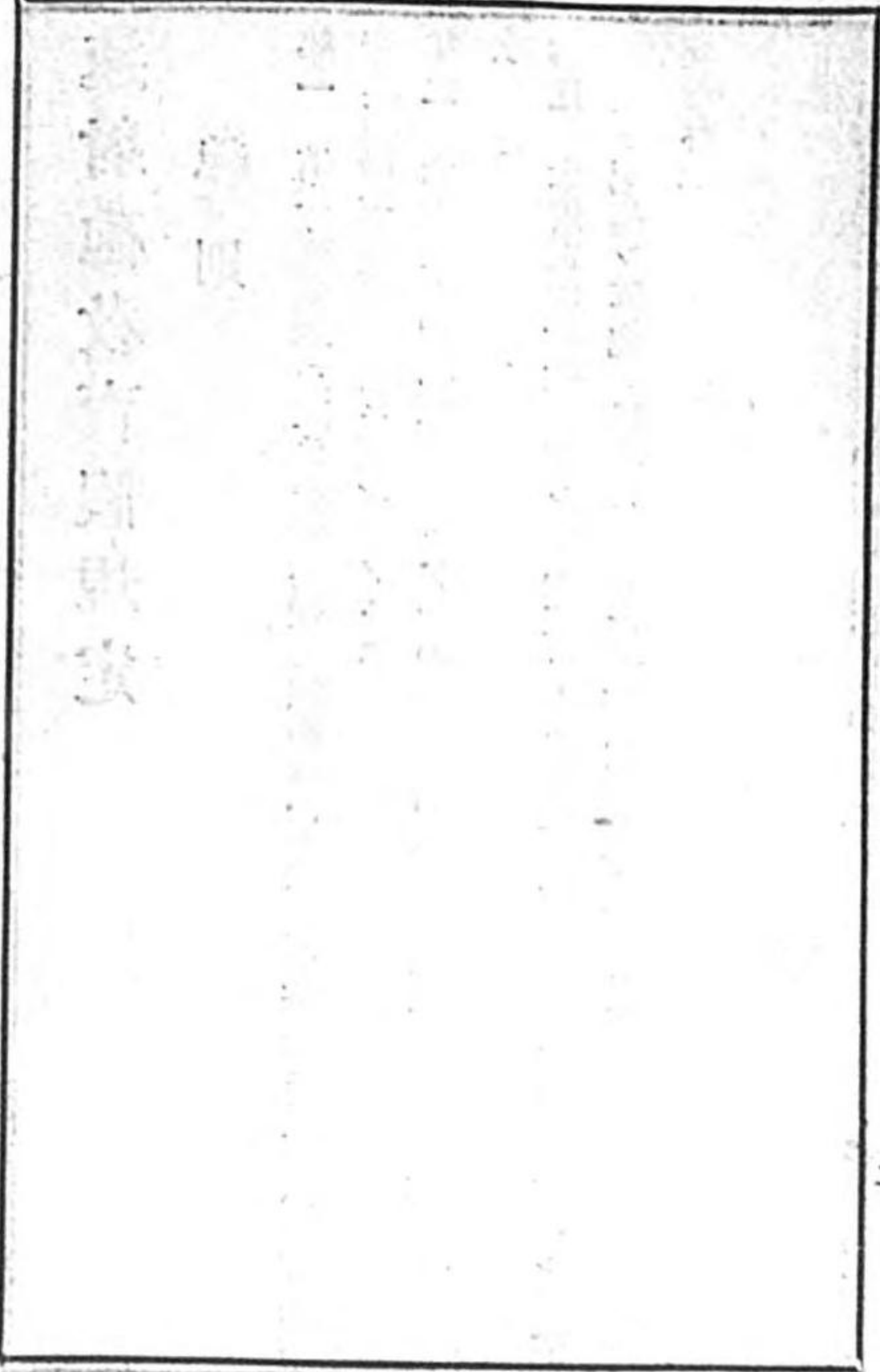
第一 模型戰車の	
第二 方向變換機	
第三 鐵線卷	

速射砲教育假規定目次 終

速射砲教育假規定

總則

- 第一 第一篇教練ニ於テハ步兵操典總則ニ、第二篇射撃法ニ於テハ機關銃、步兵砲射撃教範總則ニ據ルモノトス
- 第二 本規定中「射撃教範」トアルハ機關銃、步兵砲射撃教範ヲ示スモノトス
- 第三 本規定中射撃ニ關シテハ主トシテ戰車等裝甲セル車輛ニ對スル射撃ニ就キ記述シ其他ノ目標ニ對スル射撃ハ平射步兵砲ノ射撃要領ヲ適用スルモノトス



第一篇 教練

通則

第四 速射砲ノ主要ナル任務ハ敵ノ戰車、裝甲車ヲ撲滅スルニ在リ時トシテ敵ノ側防機關ヲ破壞シ又ハ銃眼、砲門射撃ニ任シ近距離ニ於ケル歩兵ノ戰闘ニ協力スルコトアリ

速射砲ハ低伸セル彈道、迅速ナル發射速度及甚大ナル貫徹力ニ依リ敵戰車、裝甲車ノ撲滅及銃眼、砲門射撃ニ適スルモノトス

輕快適切ナル指揮、嚴肅ナル射撃軍紀特ニ優秀ナル射撃技能及神速敏活ナル行動ハ能ク速射砲ヲシテ其效力ヲ發揚セシムル素因ニシテ教練ノ主眼トスルトコロハ此等ノ事項ヲ演練シ就中射撃動作ニ熟達セシメ以テ速射砲ノ任務ヲ達成セシムルニ在リ

第五 連射砲ハ絶エス歩兵ト行動ヲ共ニシ得ルヲ要ス之カ爲各種困難ナル地形及夜間ニ於ケル行動ニ習熟スルコト緊要ナリ又連射砲ノ射撃スヘキ目標ハ快速機關ナルコト多キヲ以テ機敏性ノ涵養ニ就テハ特ニ留意スルヲ要ス

砲手ハ戰場ニ於テ重量大ナル兵器、材料ヲ屢、長距離ニ互リ敏速ニ搬送スルヲ要スルコトアルヲ以テ平素ヨリ體力、氣力ノ養成ニ勉ムルコト緊要ナリ

第六 彈藥ノ節用並補充ハ連射砲ノ任務達成上必須ノ要件ナリ故ニ幹部以下常ニ之ニ留意シ必要ニ際シ其威力ヲ發揚スルニ遺憾ナカラシムルヲ要ス

分隊

要則

第七 分隊ノ教練ハ分隊長以下ヲシテ確實且敏活ニ動作シ協力一致シテ毫モ滯滞ナク砲ヲ使用スルコトニ習熟セシメ以テ戰鬥ノ基礎タル教練ヲ完成シ且小隊教練ノ確乎タル基礎ヲ作ルヲ主眼トス

第八 分隊ノ教練ハ先ツ部分的ニ、後綜合シテ教育シ漸次地形、地物ヲ利用シテ各種ノ戰況ニ應スル戰鬥動作ニ習熟セシメ又縦七缺兵ヲ生スルモ砲ノ使用ニ支障ナク特ニ射撃ハ一兵トナルモ尙之ヲ行ヒ得ルニ至ラシムルヲ要ス

第九 兵ニハ總テ各砲手及馭兵ノ動作ニ習熟セシムルヲ要ス教育ノ初期ニ在リテハ砲手及馭兵ノ動作ハ各別ニ教育シ其連繫ヲ要スルニ至レハ合シテ之ヲ行フモノトス而シテ緊要ニ於ケル運動ハ馭法ノ進度ニ伴ハシムルコト肝要ナリ

第十 分隊長以下ノ動作並操作間ニ於ケル位置ノ移動ハ勉メテ迅速ナルヲ要ス

第十一 分隊長及砲側ニ位置スル砲手ハ其耳ヲ保護スル爲射撃開始ニ先タ
チ綿等ヲ寬ク耳孔ニ裝ス

第十二 砲(彈藥車)ニ關スル前後、左右ノ稱呼ハ砲尾ヨリ砲口(轆桿端ヨ
リ車體)ニ面シテ稱ヘ内(外)方トハ車輛ノ中心線ニ近(遠)キ方ヲ稱ス

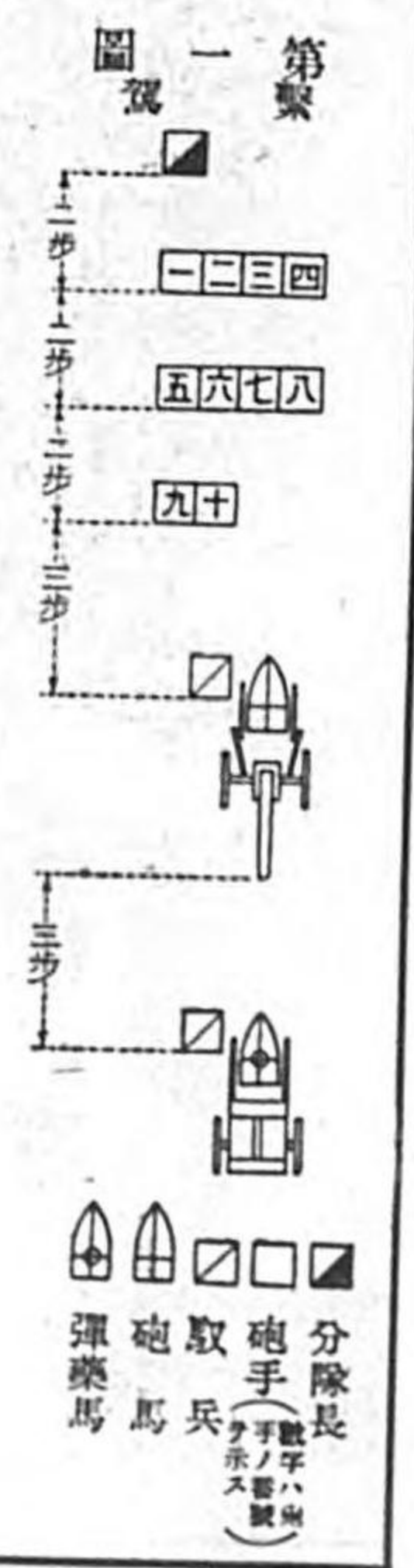
第一節 基本

分隊ノ編成及隊形並分隊長以下ノ定位

第十三 砲手ニハ一番ヨリ十番ニ至ル番號ヲ附シ馭兵ニハ其轆馬ノ名稱ヲ

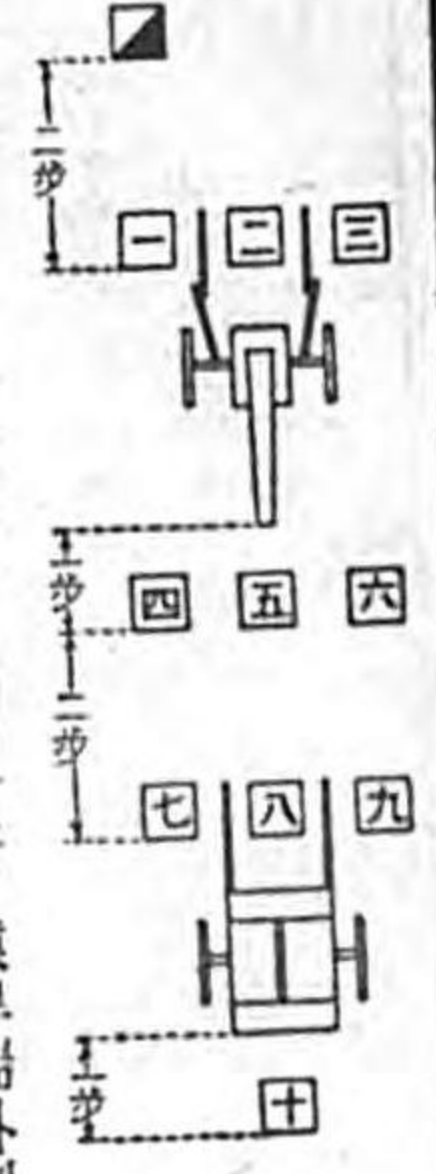
冠シ轆馬ニハ砲馬及彈藥馬ナル名稱ヲ附ス

第十四 分隊長以下ノ定位第一乃至第三圖ノ如シ



砲手ノ整列セル正面幅ハ側面縱隊ト同一トス
一番、五番及九番ハ正シク分隊長ニ重リ其他ノ砲手ハ一番、五番及九番ニ
整頓ス又砲馬馭兵ハ正シク十番ニ、彈藥馬馭兵ハ正シク砲馬馭兵ニ重ルモ
ノトス

圖二 第一其駕脫



一番ハ分隊長ニ重リ一(三)番ハ内側足尖ヲ轆桿端外側下ニ在ラシメ二番ハ
 兩轆桿中央ニテ足尖ヲ轆桿端ノ線ニ置キ五番ハ二番ニ、四番及六番ハ五番
 ノ兩側ニテ一番及三番ニ夫々重リ七番以下ハ彈藥車ヲ概ネ砲ノ延線上ニ在
 ラシムルモノトス
 砲ハ砲尾ヲ砲尾托架ニ托シ安全裝置ト爲シ高低角ヲ定位ニ在ラシメ砲口蓋、
 砲尾蓋、分畫鏡蓋、齒弧蓋及照準具蓋ヲ裝シ脚ハ繫駕姿勢ニ開キ轆桿ヲ裝
 スルモノトス

圖三 第三其駕脫



五(六)番、七(八)番及九(十)番ハ一(三)番ニ重ル兩頭鏈ハ揃ヘテ頭部ヲ右
 ニ、第一屬品箱ハ負革ヲ下方ニ、彈藥箱ハ負革ヲ上方ニシ各、提把ヲ右方
 ニ在ラシメ足尖ヨリ約十糎ヲ隔テテ之ヲ置ク
 砲手ハ定位ヲ正ス間砲、兩頭鏈、第一屬品箱及彈藥箱ヲ提クルモノトス

繫馬及脫駕

第十五 繫駕及脫駕ハ停止間ニ於テ之ヲ行フモノトス
 第十六 脫駕其一ノ隊形ヨリ繫駕セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

馬ヲ繋ケ

分隊長ハ砲手及駁兵ノ動作ヲ監視ス

二(八)番ハ砲(彈藥車)ノ左側ニ、四(十)番ハ砲(彈藥車)ノ右側ニ移リ十番ハ繋駕ニ先タチ支桿ヲ扛ク

砲馬(彈藥馬)駁兵ハ砲馬(彈藥馬)ヲ右方ヨリ轆桿ノ前方ニ導キテ馬ノ正面ニ立チ兩足ヲ約半歩踏ミ開キ左手ニ牽繩ノ端末ヲ持チタル儘兩手ニ之ヲ分チ拇指ヲ銜鎖ニ接スル如ク馬頭ヲ僅ニ高メ兩轆桿ノ間ニ靜ニ後退セシム一(二)番及七(八)番ハ各、轆桿端ヲ持チ轆桿ヲ轆把ニ通シ雙脚鎖ニ丁字鏈ヲ掛ケ三(四)番及九(十)番ハ袴革端革ヲ脚鎖ニ通シ之ヲ縛ル
操作終レハ分隊長以下直ニ定位ニ就ク

鞍馬若砲(彈藥車)ノ位置ヲ遠ク離レアルトキハ豫メ之ヲ招致シタル後繋駕スルモノトス

第十七 繋駕ヨリ脱駕其一ノ隊形ヲ取ラシムルニハ要スレハ所要ノ指示ヲ

與ヘタル後左ノ號令ヲ下ス

馬ヲ解ケ

第十六ト概ネ反對ノ順序ニ行ヒ第二圖ノ如ク位置ス

駁兵ハ脱駕終レハ鞍馬ヲ導キ彈藥車ノ後方ニ移ル

第十八 脱駕其二ノ隊形ヨリ繋駕セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

砲ヲ繋ケ

第十六ノ要領ニ依リ行フ但三番ハ一番及二番ヨリ曳綱及擔綱ヲ受領シ自己ノ曳綱ト共ニ、四番ハ曳綱及兩頭鏈ヲ、五番ハ曳綱及第一屬品箱ヲ、六番乃至十番ハ彈藥箱ヲ彈藥車ニ積載シタル後分隊長以下背囊ヲ負フモノトス

砲ヲ解ケ

第十九 繋駕ヨリ脱駕其二ノ隊形ヲ取ラシムルニハ左ノ號令ヲ下ス
分隊長以下背囊ヲ卸シタル後第十八ト概ネ反對ノ順序ニ行ヒ第三圖ノ如ク位置ス

背囊ハ砲ヲ解キタル後彈藥車ニ積載シ鞍馬及彈藥車ハ所命ノ位置ニ到ル

行進

緊駕行進

第二十 行進ノ速度及歩法ハ一般歩兵ノモノニ同シ但駁兵ハ正規ノ歩法ヲ取ルコトナク且歩ヲ揃フルヲ要セス

第二十一 直行進ヲ爲スニハ分隊長ハ與ヘラレタル目標ニ向ヒ若ハ正面ト直角ニ行進シ砲手ハ側面縱隊ノ行進ノ要領ニ從ヒテ動作シ駁兵ハ其定位ヲ保チ前方ノ兵ニ重リテ行進ス

第二十二 右(左)〔半右(左)〕向行進ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

右(左)〔斜ニ右(左)〕へ 進メ

分隊長及砲手ハ伍々右(左)〔半右(左)〕ニ方向ヲ換ヘ停止間ニ在リテハ前進

ヲ起スト同時ニ以上ノ動作ヲ爲シ續キテ直進ス但分隊長(四番)ハ半徑約七歩ノ環形ヲ畫ク如ク行進スルモノトス

駁兵ハ分隊長(四番)ノ方向ヲ換ヘ始メシ地點マテ前進シ爾後鞍馬ハ分隊長(四番)ノ後方ヲ行進スル如ク之ヲ誘導シ新正面ニ於テ其定位ニ入ラシム少シク方向ヲ換ヘシムルニハ豫メ新目標(方向)ヲ示スヘシ

第二十三 後向行進ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

半輪ニ右(左)へ 進メ

右(左)向行進ヲ連續ニ回行ヒ續キテ行進ス

第二十四 停止ニ方リ鞍馬定位ニ止ラサルモ駁兵ハ之ヲ定位ニ誘導スルコトナシ

脱駕行進

第二十五 直行進、右(左)〔半右(左)〕向行進及後向行進ハ第二十一乃至第

二十三 準シテ行ヒ歩法ハ「步調止メ」ノ要領ニ依ルモノトス但脱駕其一ノ場合ニ於テハ行進ヲ行ハサルヲ通常トス

脱駕其二ノ場合停止間ニ在リテハ豫令ニテ一番及三番ハ曳綱ヲ瓢形銀ニ掛ケ内方ノ手ヲ以テ轆桿ヲ握リ二番ハ擔綱ヲ雙脚銀ニ掛ケ兩手ヲ以テ轆桿ヲ握リ二番ノ「宜シ」ノ合圖ニ依リ一番、二番及三番ハ協力シテ架尾ヲ提ケ四番ハ兩頭鏡ヲ擔ヒ五番ハ第一屬品箱ヲ、六番乃至十番ハ彈藥箱ヲ負フモノトス要スレハ第一屬品箱及彈藥箱ハ之ヲ提ケ或ハ擔ヒ又砲ハ一番乃至五番ニテ搬送セシムルコトヲ得而シテ五人搬送ニ在リテハ第一屬品箱ハ分隊長、兩頭鏡ハ四番及五番ニテ携行スルモノトス

第二十六 停止ニ方リテハ砲手ハ砲、兩頭鏡、第一屬品箱及彈藥箱ヲ其場ニ置キ一番及三番ハ曳綱ヲ瓢形銀ヨリ脱シ二番ハ擔綱ヲ雙脚銀ヨリ脱ス

第二十七 折敷(伏臥)ヲ爲スニハ砲、兩頭鏡、第一屬品箱及彈藥箱ニ衝突セサル如ク其姿勢ヲ取ルモノトス但折敷ヲ爲スニハ右足ヲ後方ニ引ク又伏

臥ヲ爲スニハ分隊長以下兩手ヲ前方ニ著キ後方稍、外側ニ伏臥ス但二番ハ脚ニ衝突セサル如ク其位置ニ、四番ハ一步左ニ移リ、五番乃至十番ハ兩手ヲ第一屬品箱若ハ彈藥箱ノ上ニ著キ伏臥スルモノトス

行進間ニ在リテハ一旦停止シタル後動作ス此際一番及三番ハ曳綱ヲ瓢形銀ヨリ脱セス又五番乃至十番ハ第一屬品箱及彈藥箱ヲ負ヒタル場合ニ於テハ其儘トス

第二十八 折敷(伏臥)ヨリ起立スルニハ砲、兩頭鏡、第一屬品箱及彈藥箱ニ衝突セサル如ク行ヒ舊位ニ復ス

直ニ行進スルニハ「前」或ハ「駈歩」ノ豫令ニテ立チタル後砲ヲ提ケ兩頭鏡ヲ擔ヒ第一屬品箱及彈藥箱ヲ負フ

第二十九 一列側面縱隊ヲ作ラシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

一列側面縱隊作レ

一番乃至三番ハ砲ヲ提ケ四番ハ兩頭鏡ヲ擔ヒ五番乃至十番ハ第一屬品箱及

彈藥箱ヲ負ヒ第四圖ノ如キ順序ニ一列側面縱隊ヲ作リツツ前進ス



一列側面縱隊ニ於ケル各兵ノ距離ハ別命ナケレハ約三步トス若各兵ノ距離ヲ増減スルヲ要スル場合ニ於テハ「一列側面縱隊作レ」ノ號令ノ次ニ「距離何歩」ヲ加フ

其位置ニ一列側面縱隊ヲ作ラシムルニハ號令ノ前ニ「其場ニ」ヲ冠ス

一列側面縱隊ニ於ケル號令及動作ハ步兵操典第六十三ニ準ス

第三十 砲ヲ分解シテ搬送セシムル場合ニ於テハ分解及搬送ノ爲所要ノ指示ヲ與ヘタル後左ノ號令ヲ下ス

分解搬送

分隊長ハ砲手ノ動作ヲ監視ス

三番ハ砲尾蓋及齒弧蓋ヲ脱シテ五番ニ渡シ砲尾托架ヲ脱シテ右脚ニ固定シタル後砲身ヲ水平ニス

照準具、眼鏡ヲ裝著シアル場合ニ於テハ二番ハ照準具蓋ヲ取り眼鏡及照準具ヲ脱シテ五番ニ渡ス

一番ハ轆桿ヲ脱シ砲ノ左方一步ニ置キ四番ハ前方ヨリ防楯ヲ脱シ分隊長ニ渡ス

五番ハ砲尾蓋、齒弧蓋及照準具蓋ヲ帶革ニ附著シ眼鏡及照準具ヲ第一屬品箱ニ收メ屬品箱ヨリ轆桿接續具ヲ出シ轆桿ヲ接續シテ一番ニ渡シ脚及車輪ノ分解ヲ補助シタル後第一屬品箱ヲ負ヒ九番ノ彈藥箱ヲ提ク三番ハ砲身ノ結合軸ヲ脱シ一番及四番ト協力シテ砲身ヲ分解シ九番及十番ニ擔ハシム九番及十番(彈藥箱ヲ負フ)ハ砲ノ右側ニ到リ協力シテ砲身ヲ擔ヒタル後砲ノ

右方二歩ニ移ル

四番ハ二番ト協力シテ前方ヨリ格架ヲ分解シテ八番ニ擔ハシム八番ハ彈藥箱ヲ負ヒタル儘格架ヲ擔ヒ砲ノ左方二歩ニ移ル

一番及二番ハ協力シテ一番ノ曳綱ヲ砲架ニ掛ケ五番ノ接續セル轆桿ヲ以テ共ニ砲架ヲ擔ヒ六(七)番ハ彈藥箱ヲ負ヒタル後砲側ニ到リ左(右)脚ニ、三(四)番ハ左(右)車輪ニ就キ六砲手協力シテ分解シ六(七)番ハ脚ヲ擔ヒテ砲ノ兩側二歩ニ移リ三(四)番ハ各、兩頭鍵ヲ車輪ニ通シテ之ヲ擔フ
分解終レハ分隊長ハ防楯ヲ提ケ所要ノ指示ヲ與ヘタル後第五圖ノ順序ニ搬送スルモノトス

第五圖

防楯 砲架 轆桿 左車輪 右車輪 屬品箱 左脚 右脚 格架 砲身
兩頭鍵 兩頭鍵 彈藥箱 彈藥箱 彈藥箱 彈藥箱



第三十一 一列側面縱隊ニ在ル分隊ヲ散開セルムルニハ左ノ號令ヲ下ス
散レ(其場ニ散レ)

一番乃至三番ハ現在ノ隊形ヲ以テ砲ヲ搬送シ四番以下ハ砲ヲ基準トシテ概ネ小銃分隊ノ散開ノ要領ニ準シテ散開シ分隊長ハ二番ノ前方ニ位置ス
脱駕其二ノ定位ニ在ル分隊ヲ散開セシムル方法ハ前項ニ準ス

散開セルトキ各砲手ノ間隔ハ別命ナケレハ約四歩トス
行進間ハ分隊長又ハ其指定セル基準兵ヲ基準トス

第三十二 一例側面縱隊ニ在ルカ分解搬送ヲ爲シアルカ又ハ散開シアルト

キハ「集レ」ノ號令ニテ砲手ハ分隊長ヲ基準トシテ脱駕其二ノ定位ニ復ス但分解搬送ヲ爲シアルトキハ砲手ハ概ネ第三十ト反對ノ順序ヲ以テ砲ヲ結合シタル後脱駕其二ノ定位ニ復スルモノトス

陣地進入及變換

第三十三 分隊ヲ陣地ニ進入セシムルニハ通常概略ノ方向(目標)ヲ示シタル後左ノ號令ヲ下ス

砲ヲ据エ

分隊長ハ砲ノ位置竝方向ヲ指示ス

一番、二番及三番ハ豫メ砲ヲ轉向シ置キ協力シテ所命ノ位置竝方向ニ砲ヲ据ウ分隊長ハ直ニ砲ノ後方ニ移リ要スレハ砲ノ方向ヲ修正シ爾後砲手ノ動作ヲ監視ス

四番ハ兩頭銃ヲ駐鋤位置ノ外側後方ニ置キタル後一番、二番及三番ノ動作

ニ協力ス

一番ハ右脚ヲ、二番ハ左脚ヲ持チ之ヲ外方ニ開キ各、駐鋤止板ヲ脱シ兩頭銃ヲ以テ駐鋤ヲ打込ミ脚ヲ固定ス固定終ラハ一番ハ分、小隊長間ノ連絡ニ任シ二番ハ砲手ノ豫備トナル三番ハ右脚ニ跨リテ折敷キ距離分畫ヲ千メートル爲シ安全裝置ヲ解キ擊鐵ヲ壓下シタル後右手ヲ開閉槓桿ニ致シ裝填ノ準備ヲ爲ス

四番ハ左脚ニ跨リテ折敷ヲ爲シ軸臂屈折槓桿ノ握把ヲ捻テ上ケ僅ニ後方ニ移シタル後左車輪後部ヲ壓シテ外方ニ開キ槓桿ノ握把ヲ舊位ニ復ス次テ左手ヲ以テ傾斜轉輪ヲ操作シテ水準機ノ氣泡ヲ概ネ中央ニ導キタル後左手ヲ以テ方向轉輪ノ轉把ヲ、右手ヲ以テ照擊把ヲ持テ照準ノ準備ヲ爲ス
六番ハ砲ヲ据エ終ラントスルニ先タチ彈藥箱ヲ三番ノ身邊ニ搬送シ彈藥箱ノ蓋ヲ開キ壓板駐螺ヲ脱シ裝填容易ナル如ク彈藥ヲ整置ス
七番ハ六番ノ動作終リタル後六番ニ準シテ動作ス

五番ハ第一屬品箱、諸蓋及洗桿ヲ携行シ六番及七番ハ携行セル彈藥箱ヲ砲側ニ搬送シタル後八番及九番ノ許ニ到リ充實セル彈藥箱ヲ受領シ又八番ハ携行セル彈藥箱ヲ六番ニ渡シタル後十番ヨリ充實セル彈藥箱ヲ受領シ九番及十番ハ七番及八番ニ携行セル彈藥箱ヲ渡シタル後彈藥分隊又ハ豫備砲手ノ搬送セル彈藥箱ヲ受領シ各、概ネ第六圖ノ關係位置ニ伏臥ス二番ハ要スレハ分隊長ノ指示ニ依リ三番ノ裝填ヲ補助ス

第六圖



B ハ蓋ヲ開キタル彈藥箱

備考

- 一 一番ハ小隊長ノ位置ニ依リ連絡ニ便ナル如ク右又ハ左ニ位置シ七番以下ハ彈藥補充ニ便ナル如ク適當ノ距離ニ位置ス
- 二 砲側砲手ハ射撃セサル間要スレハ伏臥スルモノトス

第三十四 射擊姿勢ヨリ直ニ前進セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

前進用意 (前進用意駆歩(早駆))

前へ

「前進用意」(前進用意駆歩(早駆))ハ號令ニテ三番及四番ハ「撃方止め」ニ準シテ操作ヲ爲シニ番ハ擔綱ヲ雙脚銀ニ、一番及三番ハ曳綱ヲ圓形銀ニ掛ケ砲ヲ轉向シ分隊長以下發進ヲ準備ス但砲尾托架ハ通常之ヲ裝著セサルモノトス

「前へ」ノ號令ニテ四番ハ兩頭銃ヲ、五番ハ第一屬品箱、諸蓋及洗桿ヲ、六番(七番)ハ砲側ノ彈藥箱ヲ、七番(六番)ハ携行セル彈藥箱及六番(七番)ノ殘セシモノヲ、八番乃至十番ハ携行セル彈藥箱ヲ携ヘ分隊長及一番乃至四番ハ散開隊形ヲ取り五番乃至十番ハ概ネ現時ノ態勢ヲ以テ散兵ノ行進要領ニ從ヒ指示セラレタル方向ニ前進ス

其他ノ方法ヲ以テ前進セシムルニハ夫々所要ノ指示ヲ與ヘ又鞍馬及彈藥車

ノ行動ニ關シテハ適宜ノ時期ニ指示スルモノトス

第三十五 緊駕ヲ以テ陣地ヲ變換セシムルニハ「前進用意」(前進用意駆歩(早駆))ノ號令ノ次ニ「砲ヲ繋ケ」ト令ス

分隊長以下第三十四ニ準シテ動作シ次テ第十八ノ要領ニ依リ緊駕スルモノトス

射擊

第三十六 基本ニ於ケル射擊ハ主トシテ三番及四番ノ動作ヲ教育シ以テ戰闘ニ於ケル射擊ノ確乎タル基礎ヲ作ルニ在リ而シテ裝填、照準及擊發動作ノ圓滑ニシテ迅速正確ナルハ特ニ習熟セシムルヲ要スル事項ナリ

第三十七 射擊ノ號令ハ豫メ彈種ヲ示シタル後左記事項中所要ノモノヲ概

ネ列記ノ順序ニ令スルモノトス

目 標

方向修正量要スレハ照準點

射距離

發射法

彈種ニ關スル指示ナキトキハ徹甲彈ヲ用アルモノトス

第三十八 運動中ノ戰車ニ對スル射擊ハ通常側面ヲ現スモノニ在リテハ其前端ヲ、正面(背面)ヲ現スモノニ在リテハ其中央ヲ照準スルモノトス

第三十九 分隊長ハ射擊ニ關スル號令ヲ下シ砲手ノ動作ヲ監視ス

射擊用意及解除

第四十 射擊用意ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

射擊用意

分隊長ハ砲手ノ動作ヲ監視ス

一番ハ砲ニ面シテ折敷キ洗桿ヲ洗桿托板ヨリ脱シテ甲、乙ヲ結合シ之ヲ五

番ニ渡ス

二番ハ砲ニ面シテ左脚ニ跨リテ折敷キ照準具蓋ヲ脱シテ五番ニ渡シ照準具及眼鏡ヲ五番ヨリ受領シテ照準具托架ニ裝シ安全桿ヲ擊發位置ト爲シ照準具、眼鏡、高低照準機、方向照準機及擊發機關ノ機能ヲ點檢シ諸分畫ヲ定位ニ在ラシム

照準具及眼鏡ヲ照準具托架ニ裝著スルニハ先ツ兩手ヲ以テ照準具脚ノ筒部ヲ托架ノ相當孔ニ挿入シ右手ヲ以テ著脱螺ヲ右ニ旋回シテ之ヲ緊定シ次テ額當駐止ヲ上方ニ立テ額當ヲ相當孔ニ挿入シ(額當後端ト保護筒後端トヲ略、一致セシム)左側刻線ヲ相當孔左後端ニ一致セシメ駐止ヲ舊位ニ復シタル後眼鏡ノ駐脱螺ヲ脱シ左手ヲ以テ圓筒部ヲ眼鏡托坐ノ相當孔ニ挿入シ右手ヲ以テ駐脱螺ヲ前方ヨリ螺入ス

三番ハ右脚ニ跨リテ折敷キ砲尾蓋、分畫蓋及齒弧蓋ヲ脱シテ五番ニ渡シ砲尾托架ヲ脱シテ右脚ニ裝シ砲尾ノ安全裝置ヲ解キ高角照準機、砲尾機關

及結合軸ノ機能並藥室ヲ點檢シタル後砲尾ヲ安全裝置ト爲シ高角分畫ヲ定位ニ在ラシム

砲尾ヨリ砲尾托架ヲ脱スルニハ駐爪下端ヲ左方ニ引キタル儘高角轉輪ヲ把テ以テ砲尾ヲ十分扛ケ緊定桿ヲ緩メ托筒ヲ左脚ヨリ脱シテ砲尾托架ヲ左ニ九十度旋回シテ右脚ノ托坐ニ鉤ス

四番ハ砲口蓋ヲ脱シテ五番ニ渡シ砲腔ヲ點檢ス五番ハ砲ノ左側ニ到リ照準具及眼鏡ヲ二番ニ渡シタル後一番ヨリ洗桿ヲ、二番乃至四番ヨリ諸蓋ヲ受取り定位ニ復シ諸蓋ヲ帶革ニ縛着ス

定位ニ在ラシムヘキ諸分畫及其定位左ノ如シ

橫 尺 百位(補助分畫零位)

傾斜分畫 百位

砲架分畫 零位

高角分畫 三百密位

高低角 零位(齒弧ト齒弧準板トノ上端ヲ一致セシム)
射撃用意ハ如何ナル狀態ニ在リテモ前記ノ要領ニ準シ實施シ得ルヲ要ス而シテ操作終レハ砲手ハ舊位ニ復スルモノトス
第四十一 射撃用意ヲ解カシムルニハ左ノ號令ヲ下ス
用意ヲ解ケ
第四十ト概ネ反對ノ操作ヲ爲ス

裝填、照準及發射

第四十二 射撃ヲ爲サシムルニハ例ヘハ左ノ號令ヲ下ス

左前臺上ヲ右ヘ移動スル戰車

二ツ右ヘ(橫尺四ツ右ヘ)

九百

撃テ(續イテ撃テ 何發或ハ續イテ撃テ)

目標ヲ令セラレハ三番ハ右手ヲ以テ閉鎖機ヲ開キ彈藥ヲ裝填シ右手ヲ高角轉輪ニ致シ所命ノ射距離ヲ裝シ之ヲ分隊長ニ報告ス
 四番ハ直ニ右手ヲ照擊把(高低角大ナル修正ヲ要スル場合ニ於テハ照擊把把子)ニ、左手ヲ方向轉輪ノ轉把ニ致シ目標ヲ照準ス横尺ヲ令セラレハ右手ヲ以テ所命ノ横尺分畫ヲ裝シ其結果ヲ分隊長ニ報告シ續イテ照準ス
 照準ヲ爲スニハ右臂ヲ防危板ニ當テ砲尾ヲ右方ニ壓シアルヲ要ス距離分畫ヲ裝スルニハ彈種標示板ノ蓋ヲ開キ眼ヲ分畫面ニ略、直角ニ保チ右手ヲ以テ高角轉把ヲ廻ハシテ指針ノ上際ヲ所命ノ距離ニ概略一致セシメ次ニ轉輪ヲ以テ精密ニ一致セシムルモノトス
 彈藥ヲ裝填スルニハ三番ハ要スレハ砲腔内ヲ點檢、拭淨シタル後右手ヲ以テ彈藥ヲ持チ左手ヲ藥莖底ニ添ヘ之ヲ藥室内ニ挿入シ藥莖起縁部鎖栓裝填孔上面ニ達スルヤ一舉ニ左手ヲ以テ藥莖底部ヲ藥室後面ニ壓着スル如ク裝填スルモノトス

爾後發射ノ號令ニ應シ三番ハ要スレハ射距離ヲ點檢シタル後直ニ「宜シ」ト唱フ

四番ハ三番ノ「宜シ」ノ合圖ニ依リ直ニ照擊把ヲ正シク後方ニ引ク發射終レハ四番ハ續イテ目標ヲ照準シツツ三番ノ「宜シ」ノ合圖ヲ待ツ三番ハ直ニ彈藥ヲ裝填シ連續射ニ在リテハ距離分畫ヲ點檢シ直ニ「宜シ」ト唱フ

最初ニ、三番ノ發射ニ方リ三番ハ每發後坐量ヲ、爾後數發毎ニ之ヲ測定シ分隊長ニ報告ス而シテ後坐尺ヲ定位ニ復スルニハ必ス裝填ニ先タチ之ヲ行フモノトス

二發以上ノ號令アリタルトキハ三番ハ彈藥ヲ裝填スル毎ニ「一、(一二)、(三)」等ト唱ヘ所命ノ彈數ニ至レハ「終リ」ト報告ス

發射ニ際シ砲ノ後退スルノ虞アルトキハ分隊長ハ豫メ所要ノ指示ヲ與ヘ特ニ四番ヲシテ眼ヲ眼鏡ヨリ離隔セシム

第四十三 不發アリタルトキハ分隊長ノ指示ニ依リ約十五秒ノ後三番ハ閉

鎖機ヲ開キ彈丸ヲ抽出シ之ヲ分隊長ニ渡ス

射向、射角ノ修正及目標變換

第四十四 射向ヲ修正ハ通常眼鏡內密位分畫ニ依リテ之ヲ行ヒ例ヘハ左ノ號令ヲ下ス

ニツ右ヘ

四番ハ例ヘハ「左ニツ」ト號令ニ應スル結果ヲ分隊長ニ報告シタル後眼鏡內密位分畫ノ左ニツヲ以テ目標ヲ照準ス

第四十五 射距離ヲ修正セシムルニハ通常距離分畫ヲ變換シ（垂直目標ニ對シテハ高角密位ヲ以テ修正ス）例ヘハ左ノ號令ヲ下ス

千（五十伸ハセ（縮メ））（高角三ツ増セ（減ケ））

三番ハ所命ノ射距離（高角密位）ヲ分畫筒ニ裝シ其結果ヲ分隊長ニ報告ス
第四十六 目標變換ヲ爲スニハ三番及四番ハ直ニ新目標ニ對スル號令ニ依

リ操作ス此場合ニ於ケル射向修正量ハ定位（方向零ト稱ス）ニ復スルモノトス

射擊中若脚ヲ移動セサレハ照準シ得サルトキハ分隊長ハ砲手ニ「脚移動」ト命ス一番（要スレハ分隊長）、二番ハ直ニ砲側ニ到リ協力シテ駐鋤ヲ扛ケ分隊長ノ指示ニ依リ新方向ニ對シ脚ヲ固定シ四番ハ砲架ヲ概ネ中央ニ復シタル後三番ト共ニ操作ヲ續行ス

射擊中止、再興及停止

第四十七 射擊ヲ中止セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

擊方待テ

分隊長以下直ニ操作ヲ中止ス但三番ハ安全裝置（擊鐵ヲ抱持セシメス）ト爲ス

第四十八 射擊ヲ再興セシムルニハ新ニ射擊號令ヲ下ス此號令ニテ三番ハ

發火裝置トナシ分隊長以下操作ヲ再興ス

第四十九 射撃ヲ止メシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

擊方止メ

三番ハ彈藥ヲ抽出シ安全裝置ト爲シ左手ヲ以テ右方狼牙ノ把子ヲ左前方ニ
壓ス四番ハ諸分畫ヲ定位ニ復シ空擊ヲ爲シタル後安全裝置ト爲シ左車輪ヲ
舊位ニ復ス次テ右手ヲ以テ左方狼牙ノ把子ヲ右前方ニ壓ス一番及二番ハ駐
鋤ヲ扛ケ之ヲ定位ニ復シタル後三番ノ指示ニ依リ脚ヲ緊駕姿勢ニ閉ツ三番
ハ砲尾托架ヲ裝シテ砲尾ヲ之ニ托シ脫駕其二ノ定位ニ復ス

第二節 戰 鬪

要 旨

第五十 分隊ノ戰鬪教練ノ主眼トスルトコロハ基本ノ教練ニ於テ教育セシ

諸制式ヲ各種ノ戰況、地形ニ適應セシメ分隊ヲシテ如何ナル場合ニ於テモ
分隊長ノ指揮ニ從ヒ舉止恰モ一體ノ如ク戰鬪シ得シムルニ在リ
第五十一 分隊戰鬪教練ハ通常小隊内ノ分隊トシテ演練スヘキモノナルモ
獨立セル任務ニ服スル場合少カラサルヲ以テ之カ訓練モ亦必要ナリ此際ニ
於ケル分隊長ノ動作ハ小隊長ニ準スルモノトス

第一款 攻 擊

戰鬪ノ爲ノ前進

第五十二 戰鬪ノ爲ノ前進間ト雖敵戰車等ノ行動ニ鑑ミ常ニ迅速有效ナル
射撃ヲ開始シ得ルノ準備ニ遺憾ナキヲ要ス之カ爲緊駕ノ場合ニ於テモ豫メ
照準具及眼鏡ヲ裝シ或ハ所要ノ彈藥ヲ一時砲手ヲシテ携行セシムル等ノ手
段ヲ講スルヲ可トスルコトアリ

第五十三 戰況ニ應シ分隊間ノ距離、間隔ヲ開クニ至レハ分隊長ハ隣接分隊トノ連繫ヲ害セサル範圍ニ於テ巧ニ地形、地物ヲ利用シ要スレハ自ラ隊形、歩度ヲ選擇シ以テ敵眼、敵火ニ遮蔽シ其損害ヲ減少スルコトニ勉メサルヘカラス

特ニ脱駕シタル場合ニ於テハ偽裝ヲ巧ニシ且勉メテ砲側ニ蝟集スルヲ避ケ爲シ得ル限リ其所在ヲ秘匿スルコト必要ナリ

第五十四 脱駕シタル場合ニ於テハ分隊長ハ砲手ノ疲勞状態ヲ顧慮シ適宜之ヲ交代セシメ以テ戰鬥ニ方リ體力ノ餘裕ヲ存セシムル如ク注意セサルヘカラス

陣地進入及變換

第五十五 陣地進入ハ豫メ射擊用意ヲ爲シ且爲シ得ル限リ所要ノ準備ヲ行ヒタル後通常小隊長ノ命令ニ依リ之ヲ行フモノトス

第五十六 分隊ヲ陣地ニ進入セシムルニハ通常分隊長ハ四番ヲ伴ヒ先行シテ示サレタル方向(區域又ハ目標)ニ對シ左記事項ヲ顧慮シ狀況ニ適合スル如ク準備ヲ行フモノトス

砲位置ハ戰車ノ行動方向ヲ顧慮シ脚ヲ移動スルコトナク成ルヘク永ク射擊シ得ルコト

勉メテ平坦ニシテ廣キ射界ヲ有スルコト

駐錫位置ハ固定容易ニシテ左右高低差ナク抗力十分ニシテ且等齊ナルコト

兩車輪ノ位置ハ高低差少ク且其抗力ハ等齊ナルコト

勉メテ敵眼、敵火ニ遮蔽シアルコト

對擊ノ爲砲口前ノ砂塵飛揚セサルコト

第五十七 陣地進入及變換ニ方リテハ行動ヲ迅速ナラシムルト共ニ地形、地物ヲ利用シ又ハ遮蔽物ヲ設クル等勉メテ敵ヲシテ速射砲タルコトヲ察知

セシメサルコト緊要ナリ

射撃

第五十八 射撃ハ戰鬪動作中最モ緊要ナルモノニシテ如何ナル場合ニ於テモ正確迅速ニ行ヒ得ルヲ要ス故ニ先ツ確乎タル基礎ヲ作りタル後各種ノ地形、地物ヲ利用シ諸種ノ狀況ノ下ニ綿密周到ニ教育スルコト緊要ナリ

第五十九 射撃ハ小隊長ノ命令ニ依リ分隊長ノ號令ニテ行フヲ通常トス分隊長ハ主トシテ射撃指揮ニ便ナル位置ヲ占メ敵戰車ノ行動ニ注意シテ射撃ノ實施ヲ適切ニシ且砲手ノ動作ヲ監視スルモノトス

第六十 射撃目標ハ通常示サレタル目標(區域)中有利ナルモノヨリ逐次選定スヘキモノトス

第六十一 分隊長ハ常ニ火砲特ニ照準具、照準機、砲尾機關及駐退機ノ機能ヲ完全ナラシメ以テ射撃ノ實施ヲ圓滑ニシ且其精度ヲ良好ナラシムルコ

トニ勉メサルヘカラス之カ爲射撃間各部ノ機能ニ注意シ又射撃中止間狀況ノ許ス限リ砲ノ手入、注油及砲各部ノ點檢ヲ爲サシムルコト肝要ナリ
第六十二 分隊長ハ射撃間砲ノ狀態、彈藥ノ現況、人員、兵器、器材ノ缺損又ハ故障等ニ關シ適時其狀況ヲ小隊長ニ報告スルト共ニ機宜ノ處置ニ依リ射撃ヲ繼續スルコト肝要ナリ

第二款 防禦

第六十三 分隊長ハ時間ノ許ス限リ工事ニ依リ砲ノ威力ヲ増大シ且敵火ノ損害ヲ減少スル如ク諸般ノ設備ヲ施スコト緊要ナリ之カ爲砲床準備及待機間ノ掩護ヲ完全ニシ砲位置及彈藥補充路ニ偽裝ヲ施シ且彈藥ノ集積及砲ノ手入ニ必要ナル掩護ノ設備等ヲ施スコトス

第六十四 速射砲ハ陣地ヲ秘匿シ又ハ任務ヲ有效ニ達成スル爲時間ノ許ス限リ多クノ豫備陣地及偽陣地ヲ設ケ且敵眼ニ遮蔽シテ陣地變換ヲ爲シ得ル

如ク設備スルヲ要ス

第六十五 速射砲ハ敵戰車ノ現出セサル間ハ陣地ニ就クコトナク掩護ヲ主トシテ待機シ敵戰車我カ有效射界ニ入ラントスルヤ機ヲ失セス迅速ニ陣地ニ進入シ得ル如ク準備シアルコト肝要ナリ

第三節 夜間ノ動作

第六十六 夜間ノ動作ニ在リテハ特ニ行進方向ノ維持、不齊地ノ行進、連絡保持及鞍馬ノ誘導等ニ熟セシメ且常ニ音響防止ノ處置ヲ完全ニシ靜肅ニ動作シ又記號ニ應シ行動スルコトニ慣レシムルヲ要ス

第四節 戰鬪間兵一般ノ心得

第六十七 重量大ナル兵器ヲ搬送シテ適時歩兵ノ行動ニ追隨スル爲ニハ多大ノ困難ヲ伴フヲ常トス故ニ兵ハ旺盛ナル體力、氣力ヲ以テ協力一致萬難

ヲ排シテ所命ノ時機ニ、所命ノ地點ニ進出セサルヘカラス而シテ戰鬪ニ方リテハ殺到スル敵戰車群ニ對シ敵彈雨注ノ下能ク冷靜事ニ方リ必中ノ信念ヲ以テ任務ノ達成ニ勉メ特ニ多數ノ缺兵ヲ生シタル場合ニ於テモ敢然トシテ任務ニ邁進シ斃レテ後已ムノ氣概ヲカルヘカラス

第六十八 敵兵若我カ陣地ニ進入シ射撃ヲ繼續シ得サルニ至レハ兵ハ有ユル手段ヲ盡シテ敵ヲ擊退スルヲ要ス縱ヒ狀況不利ナル場合ニ於テモ陣地ニ止リ砲ト運命ヲ俱ニスヘキモノトス

第六十九 戰鬪間兵一般ノ心得ニ關シテハ第六十七、第六十八ノ外歩兵操典戰鬪間兵一般ノ心得ニ據ルヘシ

第二篇 射撃法

第一章 射撃ニ關スル定説

第一節 彈道

第七十 九四式三十七耗砲ノ彈道ハ彈種ニ依リ稍異ナルモ彈丸ノ經過時間ハ六百米ニ於テ約一秒、千米ニ於テ約二秒ヲ要ス
 彈道高ハ六百米以下ニ在リテハ立姿高ヲ超エス又千米ノ彈道ニ於テハ其最高度ハ約四米五十ナリ

第七十一 定偏ハ右方ニ生スルモ其量極メテ微少ナルヲ以テ千米以下ノ距離ニ在ル目標ヲ射撃スル場合ニ於テハ修正スルヲ要セス而シテ千米以上ニ千米以下ニ於テハ一密位左ニ修正スルヲ要ス

第二節 射撃上天候、氣象ノ感及

第七十二 氣温及氣壓ニ伴フ彈丸ノ射距離及方向上ニ及ス偏差ハ通常之ヲ顧慮スルヲ要セス

第七十三 射線ニ直角ナル横風ニ依ル方向偏差量第一表ノ如シ

第一表

横風一米ニ應スル方向偏差量

備考	偏差量 (密寸)	射距離 (ヤ)
二米以上ノ横風ナルトキハ本表ノ數量ニ風速ノ米數ヲ乘ス	0.1	300
	0.2	400
	0.3	500
	0.3	600
	0.4	700
	0.4	800
	0.5	900
	0.5	1000
	0.6	1100
	0.6	1200
	0.7	1300
	0.7	1400
	0.8	1500
	0.8	1600
	0.9	1700
	0.9	1800

第七十四 射線ニ平行ナル縦風ニ依ル射距離ノ増減ハ實用上顧慮スルヲ要セス

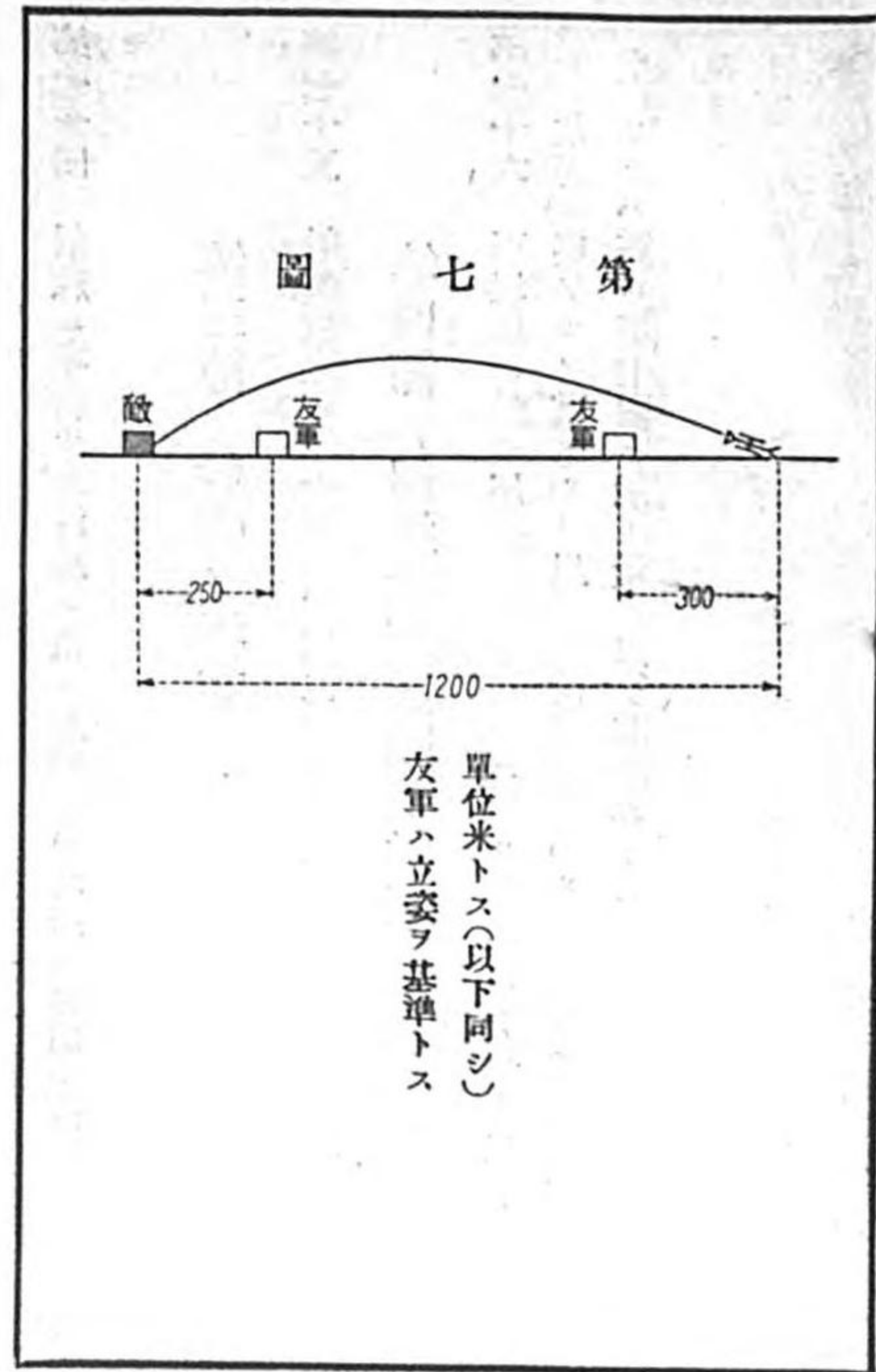
第三節 射彈ノ撒布

第七十五 射撃教範第三十第一、第二項ヲ準用ス

第四節 超過射撃及間隙射撃

第七十六 平坦地ニ於テ超過射撃ヲ行フニ方リ千二百米以下ニ在リテハ友軍ニ危害ヲ與フルノ虞アルヲ以テ通常之ヲ行ハサルヲ可トス千二百米以上ニ在リテハ概ネ第七圖ニ示ス量ヲ以テ其限界トス

第七圖



第七十七 射撃教範第十七、第十八ヲ準用ス

第五節 射撃效力

第七十八 鋼板ヲ貫通シタル彈丸ハ貫通後直ニ破裂シ戰車内ニ於テ大ナル殺傷威力ヲ發揮ス

第二章 射撃教育

要則

第七十九 射撃教範第四百九乃至第五百二十二ヲ準用ス

第八十 敵ノ戰車等ハ不意ニ現出シ且其移動迅速ナルヲ以テ之ニ對スル速射砲ノ射撃時間ハ短少ナルヲ通常トシ而モ此間多クノ目標ヲ破摧セサルヘカラス故ニ幹部ハ常ニ思テ茲ニ致シ射撃教育ヲシテ能ク戰闘ノ要求ニ適應

セシムルヲ要ス

第一節 基本教育

要旨

第八十一 教育ニ於テハ分隊長以下ノ射撃技能ヲ練磨スルモノニシテ特ニ意ヲ用ヒテ教育スヘキ事項左ノ如シ

- 一 距離分畫ノ裝定
- 二 追隨シテ行フ照準
- 三 裝填、照準及擊發動作ノ迅速圓滑
- 四 迅速ナル目標變換
- 五 劇動後ノ射撃

第八十二 射撃教範第五百五十五ヲ準用ス

第一款 射撃諸元ノ裝定及照準、擊發

第八十三 射撃諸元ノ裝定及照準、擊發ノ教育ハ砲手ヲシテ先ツ照準具、照準機、擊發機ノ機能及取扱法ノ要領ヲ會得セシメ次テ射撃諸元ノ裝定、照準及其修正並擊發ノ要領ヲ部分的ニ教育シ漸次此等ヲ綜合シテ各砲手圓滑ニ協同シ毫モ滯滞ナク正確迅速ニ動作シ得ルニ至ラシムルヲ要ス

第八十四 照準ノ教育ハ最初固定目標ニ對シ後移動目標ニ對シテ訓練スルヲ要ス

移動目標ニ對シテハ追隨シテ照準シツツ射撃スルヲ本則トス

照準、擊發ノ熟否ハ命中及射撃速度並射撃指揮ニ影響スルコト大ナルヲ以テ教育ノ各期ヲ通シ絶エス反復練習セシムルコト緊要ナリ

第八十五 照準ヲ行フニハ四番ハ先ツ眼鏡ノ上面ヨリ之ヲ概略ノ方向ニ入レ次テ額ヲ輕ク額當ニ當テ眼ヲ眼鏡保護筒ニ接シテ正シク照準ス照準ヲ完

了セハ爾後三番ノ「宜シ」ノ合圖ニ依リ機ヲ失セス撃發シ得ル如ク絶エス正確ナル照準ヲ繼續スルモノトス

照準ノ方法ハ先ツ概略ノ方向、高低照準ヲ行ヒ次テ精密ニ照準スルモノトス

第八十六 方向及高低角ノ變換ニ於ケル轉輪ノ操作ハ旋回方向及其量ヲシテ變換スヘキ方向ニ應シ心手期セスシテ一致スルニ至ラシムル如ク習熟セシムルコト肝要ナリ

第八十七 距離分畫ノ裝定ハ彈種ニ應スル裝定位置ヲ誤ラス又之カ改装ニ習熟スルヲ要ス之カ爲轉輪ノ操作ニ注意シテ射距離變換ノ動作ヲ屢々練習セシムルヲ可トス而シテ距離分畫ノ裝定ニ在リテハ其最小分畫ノ二分ノ一マテ正確ニ裝定シ得ルニ至ラシメ且常ニ轉輪ヲ「減止メ」ト爲スモノトス

第八十八 撃發ヲ行フニハ照準線ヲ目標ノ稍、前方ニ導キ發射時ニ於テ照準線正シク照準點ニ通スル如ク照撃把ヲ引クコト肝要ナリ此際照撃把ヲ回

轉セシメサルヲ要ス

第八十九 射撃教範第百六十四ヲ準用ス

第二款 射彈ノ觀測

第九十 射撃教範第百六十九乃至第百七十二及第百七十四ヲ準用ス

第九十一 戰車、裝甲車ニ命中セル射彈ヲ正當ニ觀測シ得ル能力ヲ養成スルハ極メテ肝要ナリ

射撃戰車、裝甲車ニ命中セルトキハ左ノ如キ現象ヲ生起スルコトアリ

瞬間的閃光ヲ發ス

貫通セルトキハ爆煙戰車内ヨリ噴出ス

命中セルモ跳飛セルトキハ破裂點不規ニ現ル

特異ノ音響ヲ發ス

目標運行ノ狀態ニ依リ命中ヲ判斷シ得ルコトアリ

第九十二 地上ニ著達スル徹甲弾ハ地形、土質ニ依リテ異ナルモ通常跳飛シテ第二彈道上ニ於テ破裂シ其彈著點ハ極メテ不明瞭ナルコト多キヲ以テ眞ノ彈著點ヲ正シク觀測スルコトニ慣熟スルヲ要ス

觀目線内ニテ目標高ヲ超過セル射弾ハ目標ノ爲通常觀測困難ナリ

第九十三 目標ノ移動速度ハ通常迅速ナルヲ以テ特ニ彈著ノ瞬時ヲ捕捉シ

テ觀測スルコトニ習熟スルヲ要ス

側方ニ移動スル目標ニ對シテハ彈著點ト目標トノ方向偏差量ヲ誤測シ易ク

又目標ニ對スル彈著點ノ遠近ノ離隔度大ナル場合ニ於テハ方向正シキ射彈

モ偏差アル如ク誤認スルコトアルヲ以テ注意スルヲ要ス

第九十四 戰車ニ對スル射撃ニ於テハ彈道高適當ナル場合ニ於テモ命中セ

サルトキハ通常遠彈トシテ現ルルモノトス射距離ノ近ツクニ從ヒ益々然リ

故ニ此等ヲ判斷シテ射彈ノ修正ヲ誤ラサルコト肝要ナリ

第三款 射撃開始諸元ノ決定

第九十五 射撃ハ目標ヲ直接照準シテ之ヲ行フモノトス

第九十六 前進スル戰車ニ對スル射撃ニ於テハ測定距離ヨリ第一發發射マ

テノ時間内ニ於ケル目標ノ移動量ヲ判定シ之ニ應スル射距離ヲ裝定スルモ

ノトス

第九十七 側方ニ移動スル戰車ニ對シテハ通常其前端ヲ照準スレハ可ナル

モ速度大ナル場合ニ於テハ其移動量ヲ豫メ眼鏡内密位分畫上ニ修正スルヲ

有利トスルコトアリ

戰車ノ横速ハ單位時間ニ於テ雙眼鏡内ニ於ケル移動量ニテ其概略ヲ判定ス

ルコトヲ得

第四款 射撃ノ修正

第九十八 射撃教範第八十五ヲ準用ス

第九十九 戰車ニ對スル射撃ハ通常試射ヲ行フコトナク最初ヨリ效力射ヲ行フモノトス

第百 最初ノ一、二射彈ノ彈著ノ結果ニ依リ射距離ノ修正ヲ要スル場合ニ於テハ其彈著ノ景況ニ依リ通常五十乃至百米ヲ直ニ修正スルヲ可トス

第百一 方向上ノ修正ハ連續二發以上同方位ニ偏差ヲ生シタルトキ之ヲ行フモノトス而シテ方向ノ偏差量ハ通常目標ノ中央ヨリ測定スルモノトス

第百二 平均彈道概ネ目標ニ通シタル後ハ其儘射撃ヲ繼續シ目標ノ移動ニ伴ヒ適時射距離ヲ變換シテ平均彈道ヲ目標外ニ逸セシメサルコト肝要ナリ

第百三 射距離ノ修正ハ通常距離分畫ニ依ル而シテ其量ハ五十米ト爲スヲ通常トス

第百四 連續發射間ト雖射撃諸元ニ修正ヲ要スルヲ認メタルトキハ直ニ修正スルモノトス

第百五 射撃教範第二百四ヲ準用ス
第百六 平坦地ニ於テハ射距離五百米以下ニ於テハ通常射距離ノ修正ヲ行ハサルモノトス

第五款 射撃豫習

第百七 射撃豫習ノ目的ハ指揮官以下ヲシテ射撃ニ關スル制式、法則ノ適用ニ習熟シ諸種ノ狀況ノ下ニ於ケル射撃指揮ノ要領ヲ會得セシメ以テ其射撃技能ノ向上ヲ期スルニ在リ

第百八 射撃教範第二百二十三ヲ準用ス

第百九 射撃豫習ハ室内又ハ野外ニ於テ之ヲ行ヒ指揮官ノ教育ノミナラス砲手ノ砲側操作ヲモ併セテ訓練スルコトニ著意スルヲ要ス

第百十 射撃豫習ハ最初固定目標ニ對シ後移動目標ニ對シテ行フヲ可トス

其程度進ムニ從ヒ射距離百乃至二百米ヲ間シテ數箇ノ目標ヲ準備シ置キ戰車ノ行進速度ヲ顧慮シテ逐次起伏セシメ前進ノ狀況ヲ示シテ移動目標射撃ノ基礎的演練ヲ爲サシムルモノトス

第一百十二 移動目標ニ對スル射撃豫習ヲ實施スルニ方リテハ目標運轉並彈著現示ニ任スル者トノ連絡ヲ密ニシ齟齬ヲ生セシメサルコトニ著意スルコト肝要ナリ

第二節 準備射撃及戰闘射撃

第一百十三 射撃教範第二百二十九乃至第二百三十六ヲ準用ス

第一百十四 準備射撃ハ最初固定目標ニ對シテ行ヒ後移動目標ニ對シテ之ヲ行フ

移動目標ニ對スル射撃ハ斜行目標ヲ主トシ砲手全員ニ對シ三番及四番トシテ射撃セシメ射距離ハ概ネ四百乃至八百米トスルヲ可トス

第一百五 戰闘射撃ハ分隊及小隊ニテ行フ

第一百十六 射撃教範第二百三十七乃至第二百三十九、第二百四十一乃至第二百四十三及第二百四十六乃至第二百五十二ヲ準用ス

第一百十七 戰闘射撃ハ戰況下ニ於テ多數ノ模型戰車ヲ成ルヘク實際的ニ行動セシメテ實施シ指揮官以下ノ射撃技能ノ訓練ヲ行フモノトス

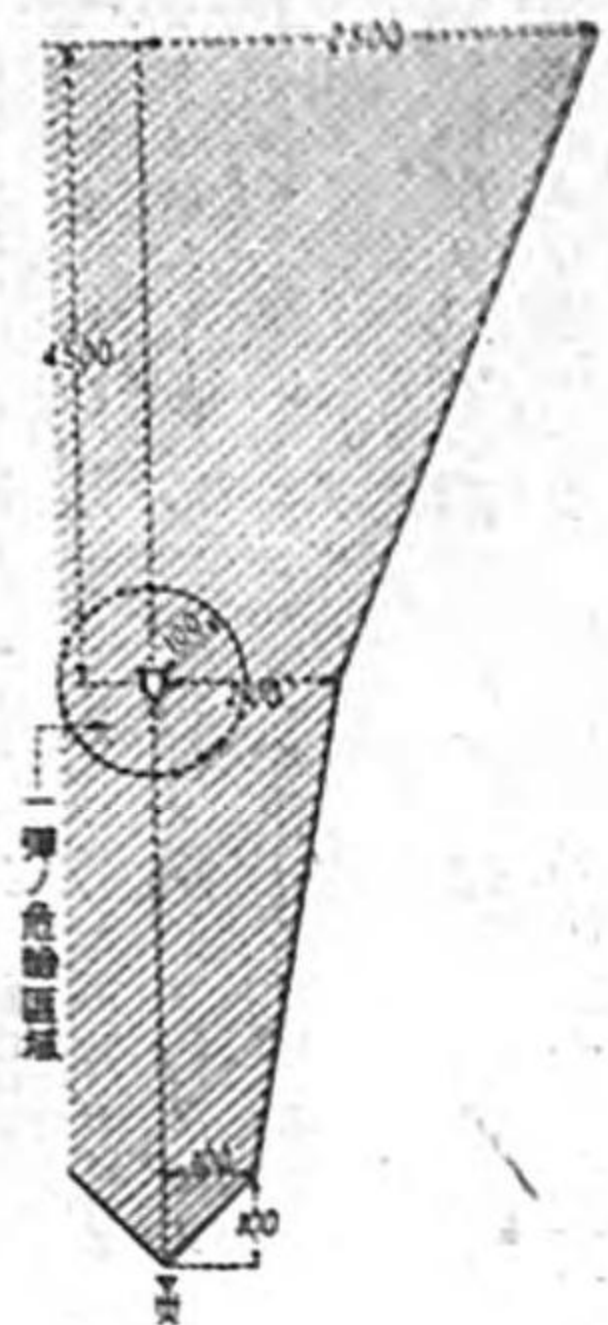
第一百十八 準備射撃及戰闘射撃ニ於テハ主トシテ戰車のニ對シ射撃セシムルモノトス

移動目標ハ模型戰車ヲ以テシ動的牽引ノ設備アル場合ノ外ハ自動貨車、輕裝甲車又ハ戰車等ニテ牽引セシム牽引速度ハ時速十乃至十五杆ヲ標準トス

第三節 射撃場ノ警戒及危害豫防

第一百十九 實彈射撃ニ於ケル危險區域ノ幅員ハ地形ニ依リ差異アルモ平坦地ニ在リテハ第八、第九圖ノ如シ統監及補助官ハ發射前射方向ヲ點檢シ要

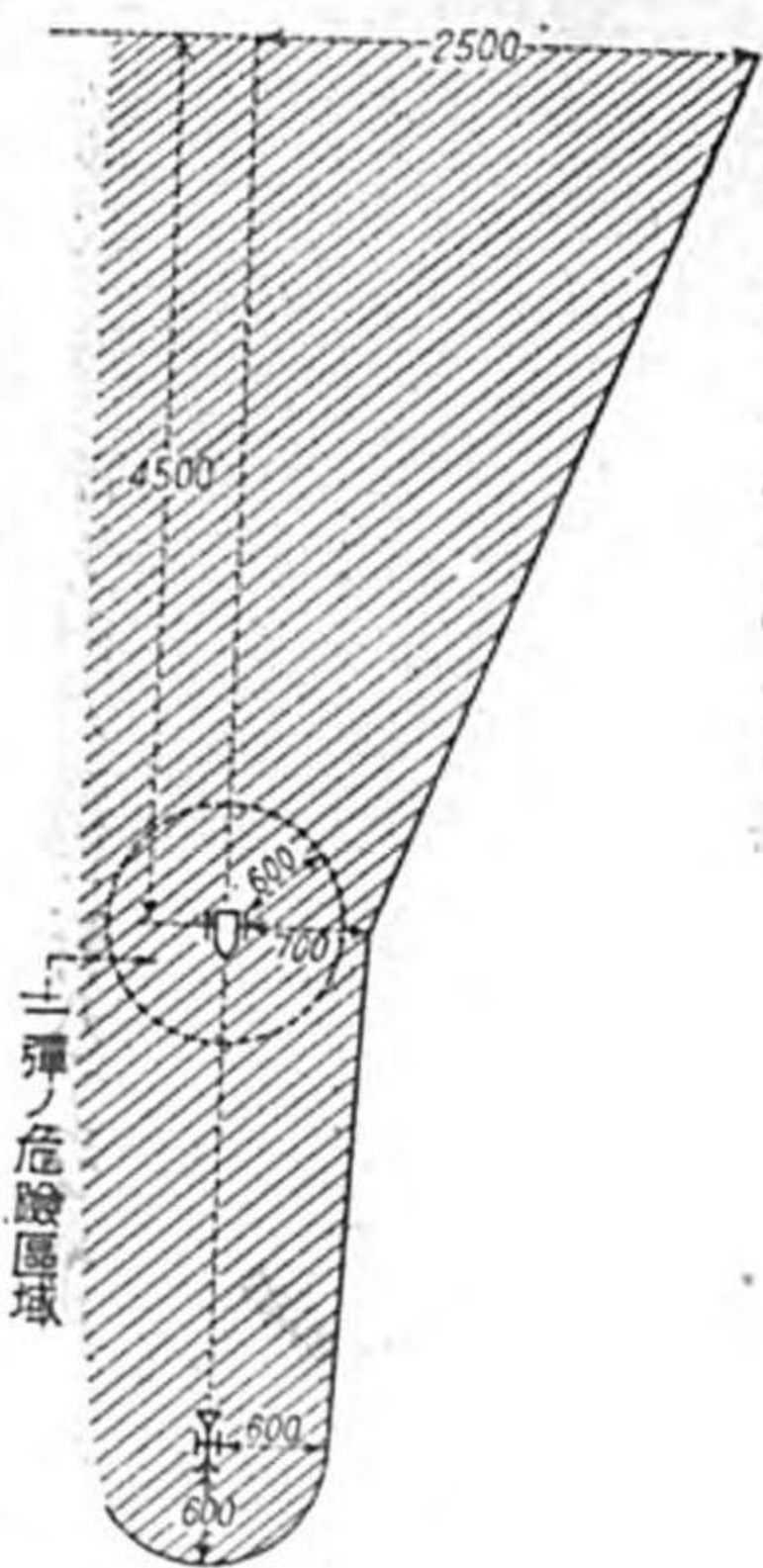
圖八第 (合場ノ用使彈用代)



注意 高低角二十度以上ノ高地稜線附近ニ位置スル目標ヲ射撃スルトキハ砲位置ノ前方六千米ヲ危險區域トス

スレハ所要ノ修正ヲ爲サシムルコト緊要ナリ
 第三百二十 目標牽引車ハ少クモ三百米以上ノ牽引索ヲ用ヒ且射線ヨリ少クモ二分畫以上(最小限百米以上)離隔シアルヲ要ス

圖九第 (合場ノ擊射彈榴及彈甲徹)



注意 高低角二十度以上ノ高地稜線附近ニ位置スル目標ヲ射撃スルトキハ砲位置ヨリ六千米ヲ危險區域トス

第二百二十一 射撃教範第二百七十三乃至第二百七十九及第二百八十一ヲ準用ス

第三章 記録及報告

第二百二十二 射撃教範第二百八十四乃至第二百八十九ヲ準用ス

速射砲教育假規定終

速射砲教育假規定附録

其一 馭法

第一 鞍馬ノ馭法ハ砲兵馭法教範及輜重兵馭法教範草案ヲ準用ス

其二 照準具ノ點檢及規正

第一 照準具ハ諸種ノ原因ニ因リ使用スルニ從ヒ其精度ヲ低下スルニ至ル故ニ時々之カ點檢ヲ行ヒ照準具ヲ規正シ得サルモノハ之ヲ射撃諸元ニ修正スルモノトス

第二 照準具ノ點檢ニ方リ其誤差最小目盛ノ半量以内ナルトキハ之ヲ顧慮スルヲ要セス

第三 傾斜水準器ヲ點檢スルニハ左ノ順序、方法ニ依ルモノトス

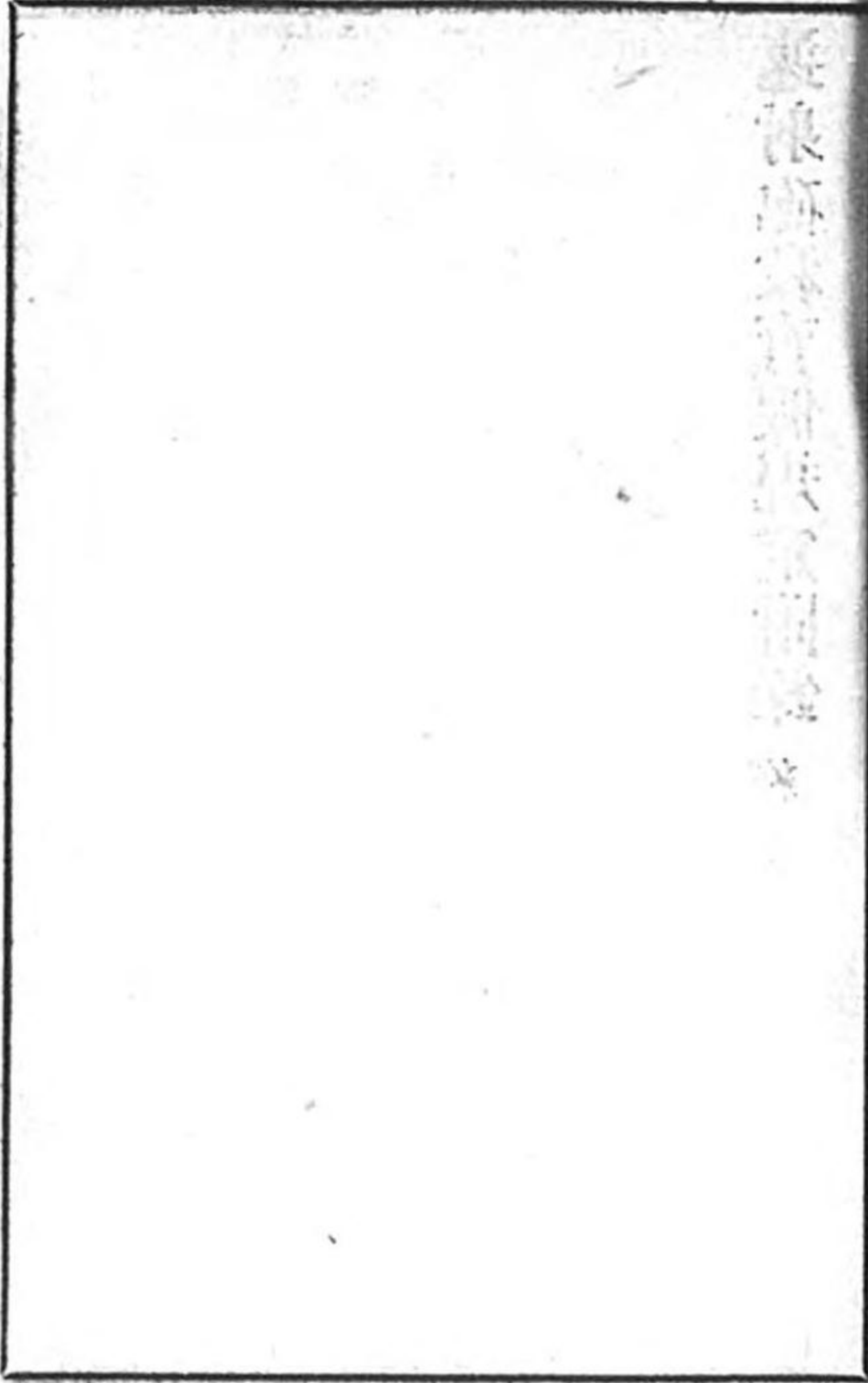
- 一 規正セラレタル象限儀ヲ以テ砲身ヲ水平ニス
- 二 傾斜分畫ノ指標ヲ百密位ノ刻線ニ一致セシメタルトキ氣泡管ノ氣泡正シク管ノ中央ニ在ルトキハ正シキモノトス若氣泡正シク管ノ中央ニ在フサルトキハ傾斜轉輪ヲ操作シテ氣泡ヲ正シク管ノ中央ニ導キ其分畫變位量ヲ以テ規正量トス

第四 照準線ヲ點檢スルニハ左ノ順序及方法ニ依ルモノトス

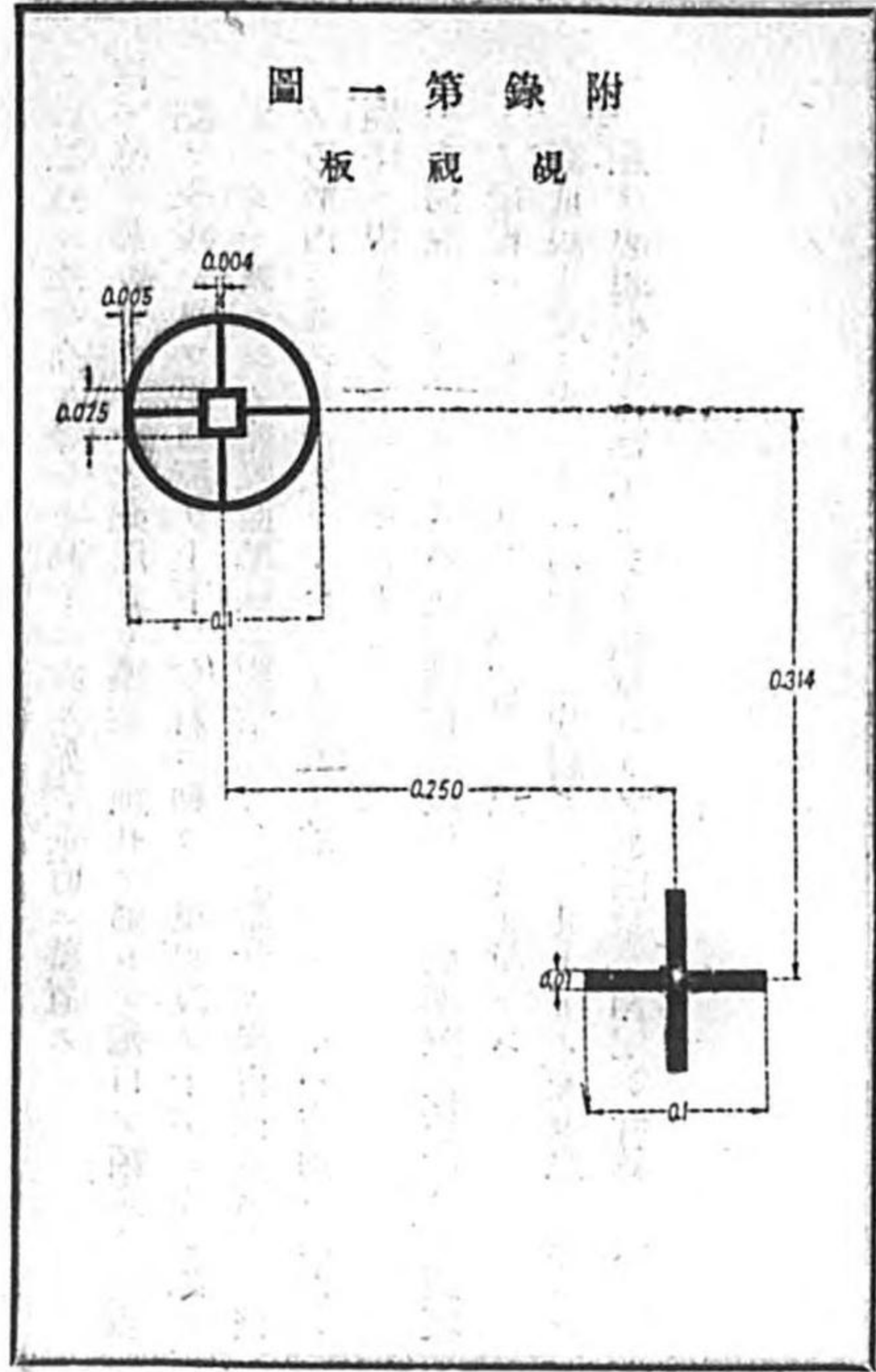
- 一 砲口帶ノ縱、橫線ニ細糸(馬尾毛ノ如キモノ)ヲ十字ニ張り空藥莢ノ爆管ヲ螺脫シ徑一乃至二耗ノ細孔ヲ穿テ紙片ヲ其細孔爆管孔ノ中央ニ位置スル如ク藥莢底面ニ貼附シテ之ヲ藥室ニ裝填ス
- 二 橫尺分畫ヲ百位補助分畫零位ニ、高角密位ヲ零位ニ、高低角ヲ定位ニ在ラシム
- 三 以上ノ如ク準備セル砲ヲ平坦地ニ据エ其前方五十米ノ距離(眼鏡直下ヨリ正確ニ測定ス)ニ第一圖ノ如キ規視板ヲ砲ニ正對シ且十字ノ交

截點概ネ砲身高ニ等シキ高サニ在ル如ク垂直ニ整置ス

- 四 砲ヲ動カスコトナク砲尾ヨリ藥莢ノ細孔ヲ通シテ砲口ノ細糸ノ交截點ヲ規視シツツ規視板ヲ上下、左右ニ動カシ規視板ノ十字ノ交截點ニ正シク一致セシム此際照準線(眼鏡十字ノ交截點)カ規視板ニ描ケル圓ノ方形内ニ通スレバ正シキモノトス若一致セサルトキハ方向及高低ノ順序ニ規正量ヲ求ムルモノトス
- 方向規正量ヲ求ムルニハ橫尺轉輪ヲ操作シテ照準線(縱線)ヲ規視板ノ縱線ニ一致セシメ其分畫變位量ヲ以テ規正量トス
- 高低規正量ヲ求ムルニハ眼鏡ヲ規視シツツ其十字ノ交截點ヲ通スル點ヲ規視板上ニ標示セシメ橫線ヨリノ離隔量ヲ測定シ計算ニ依ル



附錄第一圖
視視板圖



速射砲教育假規定附録終

附録

六六

附表第一

10月26日 金王城寺原
三番 某上等兵 四番 某一等兵
概評
分隊長 1. 注意本砲切ナリ 2. 目標標識ニカクニ 3. 方向ノ修正ヲ為 4. 射撃力向ヲ變ヘシ 5. 向ヲス方同修正 時機著シ
三番 1. 砲口ノ向修正確 ナルヲ要ス 2. 砲口ノ向修正ニ シテモ其位ニ修 スル時機著シ
四番 1. 砲口ノ向修正 ニシテモ其位ニ修 スル時機著シ 2. 三番ノ向修正 ニシテモ其位ニ修 スル時機著シ
要

速射砲教育假規定

1. 注意本砲切ナリ
2. 目標標識ニカクニ
3. 方向ノ修正ヲ為
4. 射撃力向ヲ變ヘシ
5. 向ヲス方同修正
時機著シ

三番
1. 砲口ノ向修正確
ナルヲ要ス
2. 砲口ノ向修正ニ
シテモ其位ニ修
スル時機著シ

四番
1. 砲口ノ向修正
ニシテモ其位ニ修
スル時機著シ
2. 三番ノ向修正
ニシテモ其位ニ修
スル時機著シ

要

速射砲分隊戦闘(準備)射撃實施成績表 10月26日
於王城寺原

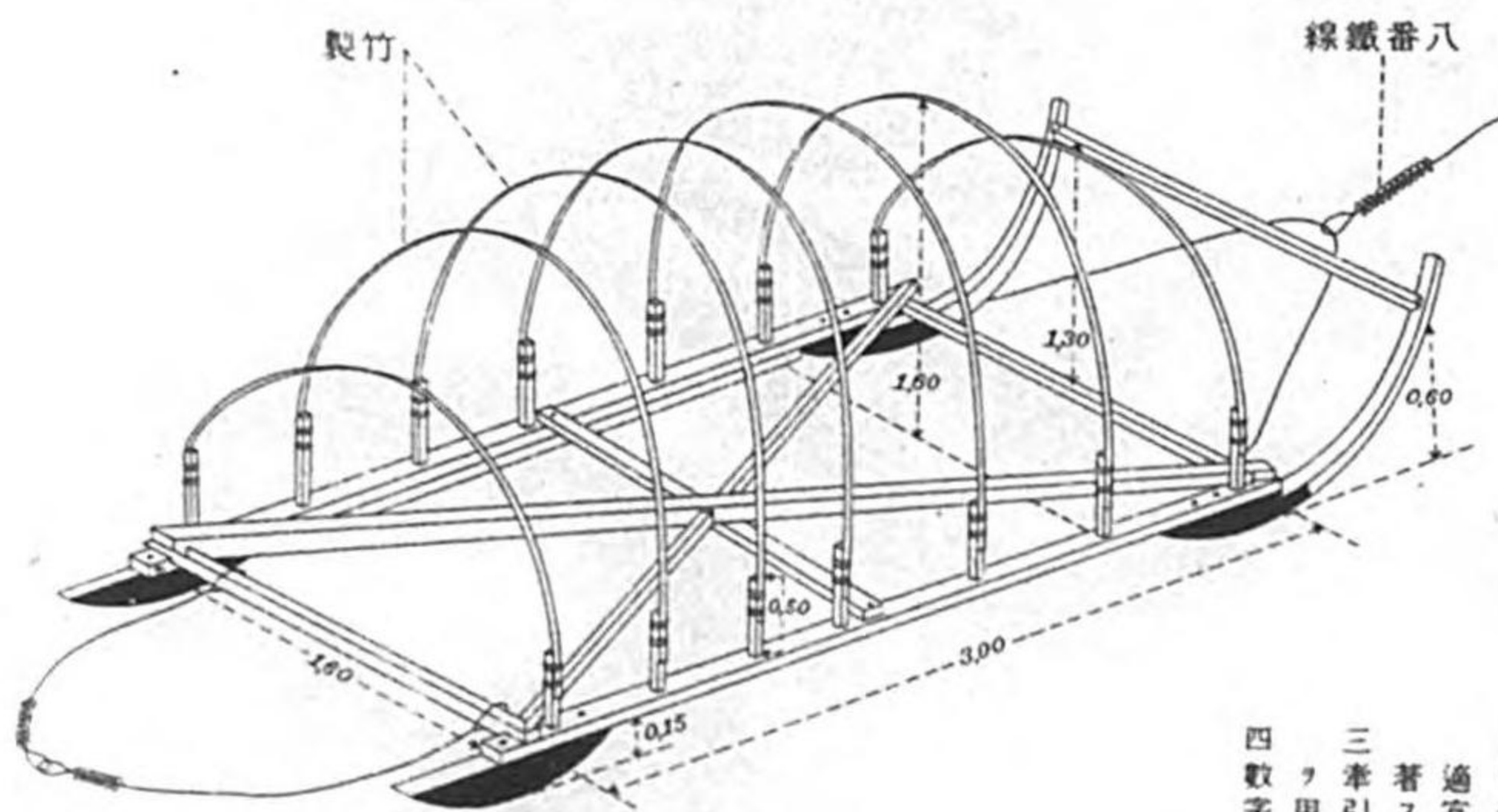
附表第一

回次	目標諸元	分隊長號令	射彈	觀測		分隊長	某軍曹	三番	某上等兵	某一等兵
				遠近	方向					
1						摘要	概要			
時刻 6.30 — 6.50	射距離 I 500-600	一本砲ノ左ヲ左ニ射速 スル戰車 850 撃テ 300 (連2)	1	+	±	目標概本 直撃ス	分隊長	I 射止概本直切ナリ 2. 目標概本ニガツテ メ方向ノ修正ヲ為 サリシハ不考ナリ 3. 目標方向ヲ變ヘレ ニ何ノメ方向修正 ノ時機ヲシ		
			2	-	±					
	3	+	±							
	4	+	±							
	5	+	+1							
	6	+	±							
	7	+	±							
	8	+	±							
	9	-	±							
	10	+	±							
	目標速度 I 約 10 km II 約 15 km	850 (連) 800 (連)								
	行進方向 I II	目標一分直右ヲ射 速スル戰車 700 撃テ 600 二ツ右へ(連3)								
統監	目標状態									
某大尉	I 概本全部ヲ 撃テ	二ツ右へ (連3) 850 (連)	1	+	-2	目標天へ 力ヲ加メ	三番	I. 裝填ニ向テ速正確 ナルヲ覺ス 2. 後退穴ヲ踏ムコト ヲ忘レメ修正ニ改 スル時機ヲシ		
			2	-	±					
補助官 某曹長	II 本砲ニハ射 速ニ關係上 下力ヲ加メ ズ	二ツ左へ (連) 500 (連)	3	?	-2	四番	I. 照準器ノ概本正 確ナルニ向テ速ヲ 加メ 2. 三番ノ直切ニテ 直ニ射撃シ得ル如 ク照準ヲ調整スル コト必要ナリ			
			4	+	±					
			5	+	±					
			6	+	±					
			7	+	+2					
			8	+	+2					
			9	+	±					
			10	-	±					
			11	+	±					
成績	發射彈	射撃時間	射撃速度	命中彈	命中百分	摘要				
績	21	0:45" 1:00" (1:45)	12	3 2 (5)	25					

記録者

模 型 戰 車 の 一 例

附 圖 第 一

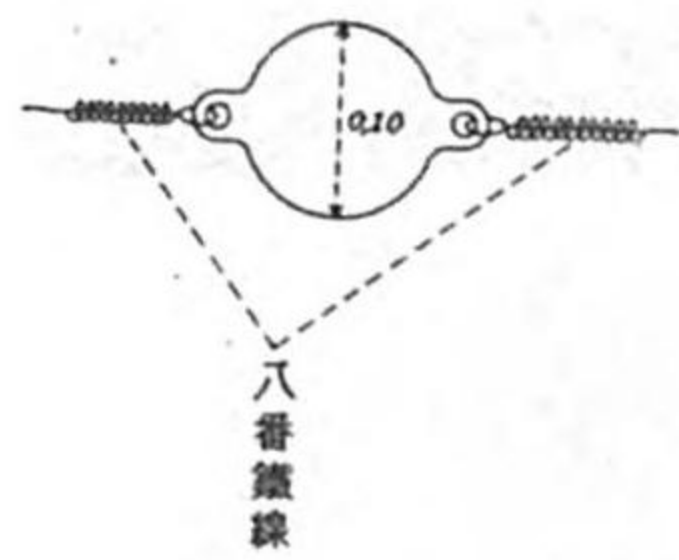


備 考

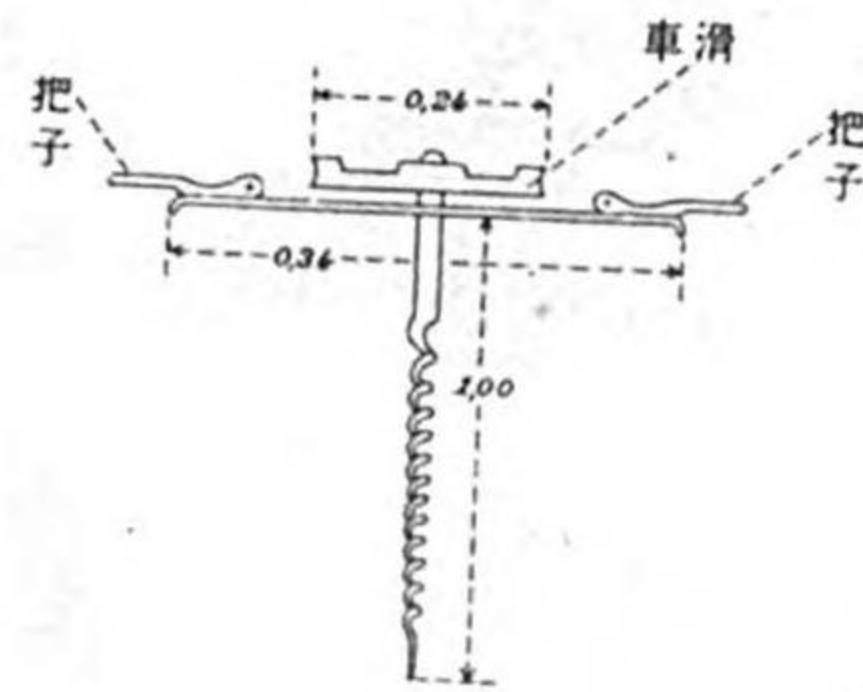
- 一 支 臺 ハ 全 部 木 製 ト シ 接 地 部 ノ 弓 狀 部 ハ 「 D タ ン 」 張 ト ス
- 二 履 根 部 ノ 彎 曲 セ ル 部 分 ハ 竹 製 ト シ 此 部 分 ニ 全 部 ヲ 覆 フ 如 ク 適 宜 ノ 色 彩 ヲ 施 セ ル 布 片 ヲ 著 ス ル モ ノ ト ス
- 三 牽 引 索 ハ 八 番 若 八 十 番 鐵 線 ヲ 用 フ
- 四 數 字 ノ 單 位 米 ト ス (以 下 同 シ)

例一ノ換變向方

球線脫



機換變向方

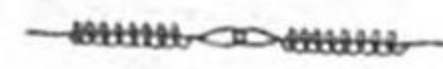
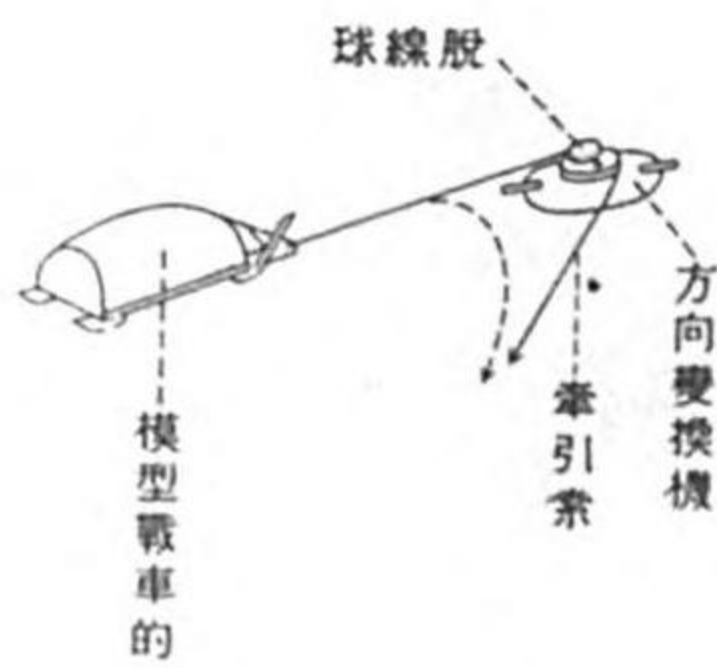


用法

方向變換機ト相俟チテ模型戰車のノ牽引索ヲ脱線スルニ用フ
 一 模型戰車のノ前方二十米附近ニ附着ス
 二 脱線要領左圖ノ如シ

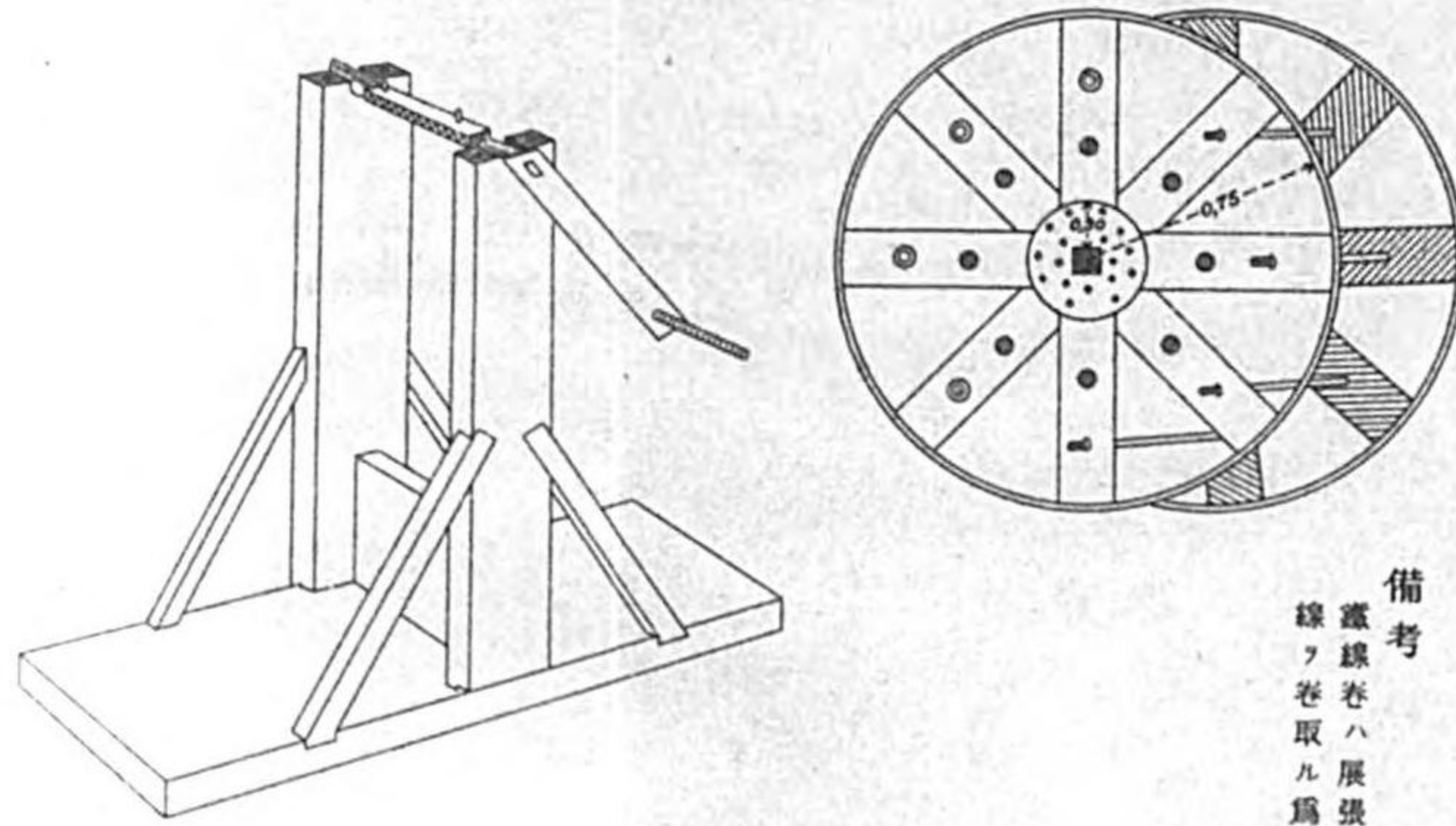
用法

脱線球ト相俟チテ模型戰車のノ方向ヲ換ヘシムル爲ニ用フ
 一 豫想スル方向變換點ニ螺入ス
 二 牽引索ヲ滑車ニ裝ス
 三 鐵線ヲ探續スルニハ滑車ノ通過スル際支障ヲ來セ、ル如ク著意スルコト肝要ナリ其要領左圖ノ如シ



例一ノ巻線鐵

附圖第三



備考
鐵線卷ハ展張シタル鐵
線ヲ巻取ル爲ニ使用ス

四月廿六日招魂式
四月廿七日臨時祭

陸軍 戶山學校軍樂隊
陸軍 戶山學校軍樂隊
海軍 軍樂隊

永久印

保存期限

永久

決裁指定

決裁指定

執行指定

牛島

七四

政務次官
參與官 同付

決裁 前後連帶
課名

軍事小島芳武記官

執行(決裁)後
同覽課名

受領番號

二五三二

起元廳(課)名

徵募課

件名

認定學校指定ノ件

大臣

次官

政務次官

古莊

高級副官

牛島

書記官

高

高

審案
筆記者

主務局長

主務課長

主務課員

主務副官
官房御用掛
計

主務局

軍徴第一四二號

受領

昭和十年六月六日

提出

昭和十年十一月六日

受領

昭和十年一月六日

了結

昭和十年一月十八日

決裁(裁決)後
行回覽

局長

課長

代

審案
筆記者

次官ヨリ文部次官宛照會案

陸並旨

昭和十年文部省令第一號第一條第九號ノ

規定ニ依リ別紙告示案ノ如ク指定致度

照會日ス

當方於テ告示ノ手續

追テ異存ナクハ公布方取計ノヘキニ付

申添フ

醫第六四〇三號 昭和十年七月六日

(右異存ナキ回答アリタル後)

陸軍省告示案 別紙ノ通

未入
陸軍省
陸軍省

國民廿六日 齋藤

國民廿六日 齋藤

千總 陸軍 軍樂 總
千前 陸軍 山學 對軍樂 總

陸軍 山學 對軍樂 總

陸軍省

昭和一〇、九、二五

陸軍省告示第七號

陸軍省告示第七號

官報照合

昭和十年陸軍省令第一號第一條第九號ノ規定ニ依リ指定スルコト左

ノ如シ

昭和十年十一月十三日

陸軍大臣 川島 義之

文部大臣 松田 源治

左ニ掲グル學校ノ課程ハ青年學校ノ課程ト同等以上ト認ムル課程ト
ス

青島學院實業學校



陸



省 部

官社九〇號

昭和十年十一月十一日

式 第三三三二號 共一



文部次官 三 邊 長 治

陸軍次官 古 莊 幹 郎 殿

認定學校指定ノ件

本月六日陸普第六四〇三號御照會ノ標記ノ件ニ就テハ當省ニ於テハ異
存無之此段回答ス



2.2322

陸軍省 第二三九號

敎座第二二二六四號第二

戰車隊敎練規定編纂ノ件照會

昭和拾年十二月九日

教育總監渡邊錠太郎

陸軍大臣 川島義之殿



戰車隊敎練規定別冊ノ通編纂致度ニ付意見承知致度



陸

軍

教訓第三十五號

戰車隊教練規定

昭和十年十一月
教育總監部

教訓第三十五號

戰車隊教練ニ關スル訓令

戰車隊ノ教練ハ當分ノ内別冊ニ據リ實施スヘシ

昭和十年十一月十五日

教育總監 渡邊錠太郎

戰車隊教練規定目次

總則	一頁
第一篇 單車教練	七頁
通則	七頁
第一章 基本	九頁
第一節 戰車	九頁
第一款 車長以下ノ定位	九頁
第二款 乘車、下車、始動及運轉停止	三頁
第三款 視察	四頁
第四款 運動	四頁
第五款 射擊	八頁
第二節 輕裝甲車	九頁

第一款	車長以下ノ定位	三
第二款	乗車、下車、始動及運轉停止	三
第三款	運動	三
第四款	射撃	三
第二章	戰闘	三
要則		三
第一節	戰車	三
第一款	視察	三
第二款	戰闘ノ爲ノ前進	三
第三款	戰闘準備	三
第四款	攻撃前進	三
第五款	射撃	三
第六款	突入及蹂躪	三

第二節	輕裝甲車	三
第一款	搜索及警戒	三
第二款	連絡	三
第三款	戰闘	三
第三章	夜間ノ動作	三
第四章	戰闘間兵一般ノ心得	三
第二篇	中隊教練	三
通則		三
第一章	密集	三
要則		三
第二節	編成及隊形	三
第二節	密集ノ諸動作	三
第一款	整頓	三

第二款	右(左)向及後向	五
第三款	行進	五
第四款	方向變換	七
第五款	隊形變換	七
第六款	解散及集合	八
第二章	戰鬪	八
要則		八
第一節	戰車小隊	八
第一款	戰鬪ノ爲ノ前進	八
第二款	攻撃準備	七
第三款	戰鬪實施	七
第四款	夜間戰鬪	七
第二節	輕裝甲車小隊	九

第一款	搜索及警戒	九
第二款	連絡	九
第三款	戰鬪	九
第三節	中隊	九
第一款	戰鬪ノ爲ノ前進	九
第二款	攻撃準備	一〇
第三款	戰鬪實施	一〇
第三章	補充、救助及修理	一〇
第三篇	大隊教練	一〇
通則		一〇
第一章	集合隊形	一〇
第二章	戰鬪	一〇
第三章	補充、救助及修理	一〇

第四篇 戰鬪原則	二七
第一章 戰鬪指揮	二七
第一節 戰鬪指揮ノ要則	二七
第二節 戰車ト諸兵種トノ協同竝連絡	二九
第二章 攻 撃	三三
第一節 陣地攻撃	三三
第二節 遭遇戦	四〇
第三章 追 撃	四四
第四章 森林及住民地ノ戰鬪	四四
第五章 機甲部隊ニ對スル戰鬪	四六
第六章 補充、救助及修理	四六
附 録	四六
觀兵ニ關スル規定	四六

附表

第一 指揮連絡記號表	
第二 他兵種トノ連絡記號ノ一例	
附 圖	
第一 指揮官旗	
第二 閱兵式ノ隊形	
第三 分列式ノ隊形	

戰車隊教練規定目次終

戰車隊教練規定

總則

第一 戰車ハ步兵ニ緊密ニ協同シテ戰鬪スルヲ本旨トス而シテ其本領ハ卓越セル機動力、火力、踏破力並裝甲威力ニ依リ率先敵ヲ壓倒蹂躪シ友軍ノ志氣ヲ鼓舞作興シ以テ全軍戰捷ノ途ヲ拓クニ在リ故ニ戰車兵ハ犧牲的精神ニ富ミ剛膽ニシテ沈著慧敏ニシテ果斷能ク其本領ヲ發揮スルヲ要ス

兵器ヲ尊重シ彈藥、燃料ヲ節用シ特ニ戰車ノ整備ヲ完全ニシ以テ戰鬪威力ノ發揮ニ遺憾ナキヲ期スヘシ

第二 戰鬪ノ基礎タル諸教練ハ中隊ニ於テ之ヲ完了スルモノトス

他兵種特ニ歩兵トノ協同ニ關スル事項ハ單車教練ヨリ綿密ニ教育シ小隊以上ヲ以テスル教練ノ基礎ヲラシムルコト緊要ナリ又歩兵ト連合スル教練ハ

總則

一

機會ヲ求メ勉メテ之ヲ行フヲ要ス

第三 奇襲的效果ヲ收ムルハ戰車戰闘ノ爲特ニ緊要ナリ之カ爲諸般ノ教練ニ於テハ特ニ企圖及行動ノ秘匿、機動ノ神速、好機ノ捕捉等ニ留意シ演練スルヲ要ス

敵ニ對シ我カ企圖及行動ヲ秘匿センカ爲ニハ地形及時期ノ利用、速度及隊形ノ適用、偽裝若ハ偽行動ノ實施等ニ依リ其目的ヲ達スルコト必要ナリ
機動ヲ神速ナラシメンカ爲ニハ特ニ周到ナル準備、輕快機敏ナル指揮、整齊敏活ナル運動ニ依リ過誤滯滞ナク且機ヲ失セス所望ノ行動ヲ實施シ得ルヲ要ス

第四 戰闘間ニ於ケル戰車ノ指揮及連絡ハ困難ナルヲ以テ特ニ嚴正ナル軍紀、適切ナル獨斷、緊密ナル協同等ヲ必要トス故ニ教育ノ初期ヨリ之カ涵養ニ遺憾ナカラシムルヲ要ス

指揮、連絡ノ爲記號ヲ用フルコト多キヲ以テ指揮官以下之ニ習熟スルコト

緊要ナリ

第五 戰車内ヨリスル視察ハ戰闘威力發揚ノ爲極メテ肝要ナリ故ニ視孔、展望窓、回轉展望窓又ハ眼鏡ヨリスル彼我ノ狀況及地形ノ觀察、目標ノ發見保持、距離ノ測定並方向ノ維持等ニ關シ指揮官以下之ニ慣熟スルコト肝要ナリ

方向維持ノ爲ニハ磁石、方向指示器及地圖ノ利用ニ習熟スルヲ要ス

第六 戰車ハ夜間行動スルコト多ク且時トシテ夜間戰闘ニ加入スルヲ要スルコトアリ故ニ夜間教練ヲ行ヒ各級指揮官ヲシテ困難ナル指揮掌握ニ慣レシムルト共ニ部隊ヲシテ各種ノ狀況ニ於テ靜肅且整齊確實ニ所命ノ地點ニ到達シ戰闘準備ヲ整ヘ或ハ戰闘ヲ實行シ得シムル如ク訓練スルヲ緊要トス

黎明、薄暮ヲ利用スル行動及戰闘ニ關シテモ亦然リ

第七 五寒、炎熱、雨雪、風塵等ハ戰車隊ノ活動ニ影響スルコト甚大ナリ

故ニ教育ノ初期ヨリ機會ヲ捉ヘテ此等ノ場合ニ於ケル動作ヲ訓練スルヲ要ス

第八 戰車ハ敵ノ瓦斯攻撃ヲ受ケ或ハ撤毒地ニ遭遇スルモ躊躇スルコトナク戰闘ヲ遂行セサルヘカラス之カ爲晝夜ヲ問ハス瓦斯ニ對スル警戒、防護竝瓦斯及煙内ニ於ケル戰闘動作ニ熟セシムルト共ニ兵器、器材ノ消毒ニ關シ訓練スルヲ要ス

第九 戰闘間故障戰車ノ救助、修理ヲ迅速ニ實施スルハ戰闘遂行ノ爲緊要ナルヲ以テ屢ニ此種教練ヲ行ヒ又彈藥、燃料及水ノ補充ハ戰闘力ヲ保持増進スル爲必要ナルヲ以テ苟モ機會アラハ此種演習ヲ實施スルヲ要ス

第十 兵器ノ取扱、保存ノ良否ハ戰車隊ノ戰闘力ニ影響スルコト極メテ大ナリ故ニ幹部以下兵器ノ構造、機能ニ精通シ點檢、調整及取扱ニ熟達シ以テ其威力ヲ發揚スルニ遺憾ナキヲ期スヘシ

第十一 教練ニ際シテハ人員及兵器等ノ損傷セル場合ニ於テモ指揮官以下

ノ適切ナル協同動作ト應急處置トニ依リ遺憾ナク戰闘ヲ遂行シ得ル如ク訓練スルコト肝要ナリ

第十二 戰況ヲ設ケテ行フ教練ニ在リテハ實戰ノ光景及感想ヲ現スコトニ勉メ特ニ敵ノ對戰車手段及敵彈ノ集中等ニ著意シ各種地形ニ於テ實戰的ニ演練スルヲ要ス

第十三 教練ニ於テハ危害ヲ伴フコト多キヲ以テ軍紀ヲ嚴守スルト共ニ演習ノ構成及審判官ノ配置等ニ留意スルヲ要ス

第十四 戰闘間兵ハ各自各異ノ動作ヲ爲スヘキ場合多シ故ニ教練ニ際シテハ幹部ハ特ニ監督ヲ嚴ニスルト共ニ兵ヲシテ各々其責務ノ重大ナル所以ヲ十分ニ自覺セシメ自ラ進ンテ難事ニ服スルノ慣習ヲ養成スルコト肝要ナリ

第十五 戰車隊相互間ニ用フル指揮連絡記號ハ附表第一ノ如シ但車内ニ於テ行フ記號ハ第二十一ニ據ルモノトス
其他所要ニ應シ適宜ノ記號ヲ定メ狀況ニ依リ黑板、腕木、信號彈及音響等

ヲ使用スルコトアリ

戰車隊ト他兵種トノ間ニ於ケル連絡記號ノ一例附表第二ノ如シ

第十六 車輛ノ間隔(距離)トハ併列(重疊)セル車輛ノ軸心ノ隔リ(空間)ヲ謂フ

第十七 本規定ニ於テハ八九式中戰車及九四式輕裝甲車ニ就キ記述ス

輕裝甲車及輕裝甲車小隊ノ爲ニハ特ニ定ムルモノノ外戰車及戰車小隊ニ就キ示セル事項ヲ準用スヘシ

第十八 本規定ニ示ササル事項ニ關シテハ步兵操典ニ據ルモノトス

第一篇 單車教練

通則

第十九 單車教練ノ目的ハ車長以下ヲ訓練シテ諸制式及諸法則ニ熟セシメ協同一致毫無滯滞ナク確實敏捷ニ動作シ得ルニ至ラシメ以テ部隊教練ノ確乎タル基礎ヲ作ルニ在リ

第二十 單車教練ハ先ツ兵ニ對シ基本ノ動作ヲ各別ニ教育シ其進歩ニ伴ヒ漸次之ヲ綜合シテ車長以下ノ協同ヲ演練シ各種ノ狀況ニ應スル戰鬪動作ニ習熟セシムルヲ要ス

第二十一 車長ハ指揮ノ爲號令若ハ命令ヲ用ヒ又ハ記號ヲ以テ之ニ代フ車内ニ於テ車長ノ操縱手及射手ニ對シテ行フ記號左ノ如シ

前進 操縱手ノ背ヲ一回押ス(小笛又ハ電鈴一短聲)

停止 操縱手ノ襟ヲ一回引ク(小笛又ハ電鈴一長聲)

急停止 操縱手ノ襟ヲ強ク數回引ク(小笛又ハ電鈴短聲急連續)

増速 前進記號ニ同シ

減速 操縱手ノ襟ヲ連續二回輕ク引ク(小笛又ハ電鈴二短聲)

旋回 操縱手ノ轉回スヘキ方側ノ肩ヲ引ク

(右ハ小笛又ハ電鈴一短聲及一長聲
左ハ小笛又ハ電鈴二短聲及一長聲)

後退 減速ノ記號ニ同シ

撃テ 射手ノ背ヲ押ス

撃方待テ 射手ノ肩ヲ壓下ス

車長ノ號令又ハ命令ハ乘員中之ヲ了解セル者直ニ傳達シ受令者ハ應答又ハ復唱スルモノトス

第二十二 前方輕機關銃ヲ前方銃、砲塔輕機關銃ヲ砲塔銃、戰車砲ヲ砲ト

略稱シ砲塔銃及砲ヲ砲塔火器ト稱ス
前方銃ヲ操作スル者ヲ銃手、砲塔火器ヲ操作スル者ヲ砲手ト稱シ此等ヲ射
手ト總稱ス
輕裝甲車ニ在リテハ車長ハ射手ヲ兼ヌルモノトス

第一章 基本

第一節 戰車

第一款 車長以下ノ定位

第二十三 車長以下下車ノ定位第一圖ノ如シ